

静岡埋蔵文化財調査研究所調査報告 第3集

椿野遺跡 I

昭和57年度都田川河川改修工事(浜松地区)

埋蔵文化財発掘調査報告書

1984

財團法人 浜松市博物館付属

静岡埋蔵文化財調査研究所

静岡埋蔵文化財調査研究所調査報告 第3集

椿野遺跡 I

昭和57年度都田川河川改修工事(浜松地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

1984

財團法人 真府博物館付属
静岡埋蔵文化財調査研究所

序

昭和57年4月、県内における埋蔵文化財の調査研究を目的として設立された本研究所の初年度事業の一環としたものが、都田川河川改修工事に伴う椿野遺跡の調査であった。

椿野遺跡は、古くより浜名湖北岸の代表的な弥生時代遺跡として知られ、昭和56年度には浜松市遺跡調査会による発掘調査の成果として多量の遺物出土が知られて、再び注目をあびたのであった。今回の調査においては、堅穴住居跡や堀立社建物跡などとともに多量の弥生土器や銅鏡などが発見されたことによって、都田川流域における弘生時代集落の様相を明確にすることができたのであった。なかでも9点を数える銅鏡の出土は、集落遺跡における県内最多数出土例として特筆すべきものであり、今後の検討課題を提起することとなったのである。

こうした内容をもつ本書は、椿野遺跡調査報告書「I」であって、それはすでに実施された58年度調査、予定されている59年度の内容に継承すべきものとなる。

本調査と本報告書の刊行には、多くの人々の援助と協力があった。なによりも深い理解をもつて事業にあたられた静岡県浜松工事事務所に敬意を表するものであり、あわせて、献身的な努力をおしまれなかった浜松市教育委員会および指導助言にあたられた静岡県教育委員会に深い謝意を呈するものである。また調査及び報告書の執筆に關係した当所員の苦労に感謝する。

昭和59年3月

財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所
所長 斎藤 忠

例 言

1. 本書は昭和57年度都田川河川改修工事（浜松地区）埋蔵文化財発掘調査に伴なう調査報告書である。
2. 調査は静岡県浜松土木事務所から委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、調査調整機関 浜松市教育委員会、調査実施機関財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所で実施した。
3. 発掘調査は、昭和57年12月15日から昭和58年3月26日まで実施し、整理、報告書作成作業は、昭和58年7月20日から昭和59年3月30日まで実施した。
4. 調査は静岡埋蔵文化財調査研究所・調査研究員・足立順司、浜松市教育委員会・鈴木敏則を担当者として実施した。また、静岡埋蔵文化財調査研究所・主任調査研究員・佐野五十三が援助した。
5. 本書の執筆は足立順司があたり、編集・刊行については静岡埋蔵文化財調査研究所が行った。
6. 昭和58・59年度調査については昭和59年度に椿野遺跡調査報告書Ⅱに含めて刊行する予定である。

遺構遺物の標記

遺 構 (S)		遺 物 (R)	
A	柵	W	木製品
B	堅穴住居跡	P	土製品
C	祭祀遺構	S	石製品
D	溝	M	金属器
E	井 戸	B	玉 類
F	土坑・土壙		
G	小鋸治遺構	E	その他
H	堀立柱建物		
P	小穴 (pit)		土器番号のみで符号なし
X	その他		

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	3
第4節 土 層	4
第Ⅱ章 位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
(1) 原始から古代へ	7
(2) 古代から近世へ	9
第Ⅲ章 弥生～奈良時代の遺構と遺物	11
第1節 弥生・古墳時代の遺構	11
(1) 突穴住居跡	11
(2) 掘立柱建物跡	11
(3) 溝状遺構	11
(4) 士 坑	21
(5) ピット	26
(6) その他の遺構	26
第2節 奈良時代の遺構	26
第3節 出土遺物	26
(1) 弥生土器・土師器	26
(2) 古墳時代の土師器	29
第Ⅳ章 中世の遺構と遺物	35
第1節 遺 構	35
(1) 溝状遺構	35
(2) 井戸状遺構	38
(3) 柱穴・ピット群	38
(4) 突穴遺構	38
第2節 出土遺物	39
第Ⅴ章 ま　と　め	44
第1節 弥生時代について	44
第2節 中世について	45

挿 図 目 次

第 1 図	位 置 図	1
第 2 図	グリッド配置図	2
第 3 図	柄野遺跡上層断面図	5
第 4 図	周辺遺跡分布図	8
第 5 図	柄野遺跡地形図	12
第 6 図	柄野遺跡全休図	13
第 7 図	住居跡・掘立柱建物跡実測図	16
第 8 図	溝状造構実測図(1)	17
第 9 図	溝状造構実測図(2)	18
第 10 図	溝状造構実測図(3)	19
第 11 図	溝状造構実測図(4)	20
第 12 図	土坑尖削図(1)	22
第 13 図	土坑尖削図(2)	23
第 14 図	土坑尖削図(3)	24
第 15 図	土坑尖削図(4)	25
第 16 図	弥生土器尖削図(1)	28
第 17 図	弥生土器尖削図(2)	29
第 18 図	弥生土器尖削図(3)	30
第 19 図	弥生土器尖削図(4)	31
第 20 図	弥生土器尖削図(5)	32
第 21 図	弥生土器尖削図(6)	33
第 22 図	弥生土器尖削図(7)	34
第 23 図	溝状造構実測図(5)	36
第 24 図	溝状造構実測図(6)	37
第 25 図	井戸状造構火測図	37
第 26 図	柱穴断面図	38
第 27 図	竪穴造構実測図	39
第 28 図	中世土器・陶器尖削図(1)	41
第 29 図	中世土器・陶器尖削図(2)	42
第 30 図	土鍾尖削図	43

挿表目次

第 1 表	土器計劃概観	43
第 2 表	土器觀察表(1)	46
第 3 表	土器觀察表(2)	47
第 4 表	土器觀察表(3)	48
第 5 表	土器觀察表(4)	49
第 6 表	土器觀察表(5)	50
第 7 表	土器觀察表(6)	51
第 8 表	土器觀察表(7)	52
第 9 表	土器觀察表(8)	53
第 10 表	土器觀察表(9)	54

図版目次

図版 1	1. 遺跡遠景	(航空写真)
	2. 調査前遠景	(東より)
図版 2	1. 調査前遠景	(南より)
	2. 調査前近景	(東より)
図版 3	1. S B 01 遺物出土状態	(南より)
	2. S H 01 堀立柱建物跡	(北より)
図版 4	1. S D 14 溝状遺構全景	(北より)
	2. S D 14 溝状遺構遺物出土状態	(北より)
	3. S D 23*29 溝状遺構全景	(南より)
図版 5	1. S D 24 溝状遺構全景	(東より)
	2. S D 24 溝状遺構全景	(南より)
	3. S D 24 溝状遺構出土状態	(北より)
図版 6	1. S D 25 溝状遺構遺物出土状態	
	2. S D 25*26 溝状遺構遺物出土状態	
	3. S D 29 溝状遺構遺物出土状態	
図版 7	1. S D 30 溝状遺構全景	(北東より)
	2. S D 32 溝状遺構出土状態	(北より)
	3. 鋼鐵山上状態	
図版 8	1. S F 01 上坑全景	(南より)
	2. S F 07 土坑全景	(南より)
	3. S F 08 上坑全景	(西より)
図版 9	1. S F 11 土坑全景	(北より)
	2. S F 14 土坑全景	(西より)

- 図版 9 3. SF 15 土坑全景 (北より)
図版 10 1. SF 20 土坑全景 (南より)
2. SX 22 土坑全景 (北より)
図版 11 1. SX 03 土器集中箇所 (東より)
2. SX 03 土器集中箇所 (北より)
3. SX 03 土器集中箇所 (底面)
図版 12 弥生面全景 (西より)
図版 13 弥生面全景 (東より)
図版 14 1. SD 02 溝状遺構 (北より)
2. SD 02 溝状遺構遺物出土状態
3. SD 03・04・07 溝状遺構 (北より)
図版 15 1. SE 01 井戸状遺構 (北より)
2. SE 01 井戸状遺構曲物出土状態
3. SE 02 井戸状遺構 (北より)
図版 16 1. 中世面柱穴群 (西より)
2. 中世面柱穴群 (北より)
3. 中世面柱穴群 (北より)
図版 17 中世面全景 (西より)
図版 18 弥生土器(1)
図版 19 弥生土器(2)
図版 20 弥生土器(3)
図版 21 弥生土器(4)
図版 22 弥生土器(5)
図版 23 弥生土器(6)
図版 24 中世土器・陶器(1)
図版 25 1. 中世陶磁器(2)
2. 土 鍋

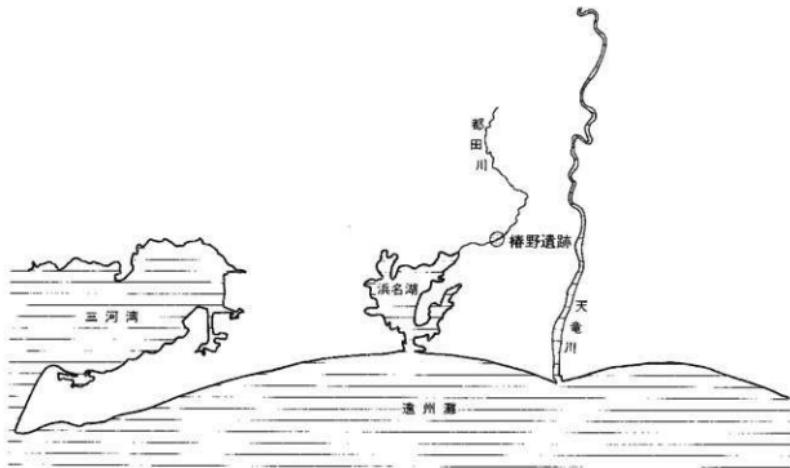
第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経過

昭和49年7月のいわゆる、七夕豪雨は、静岡県下に甚大な被害をあたえた。浜松市、細江町にわたって貫流する都田川についても、堤防の欠壊により、流域に大洪水をひきおこし、著しい被害をもたらした。これを契機として、浜松市都田町から引佐郡細江町にかけての都田川防災工事が策定された。この川の流域は、すでに多くの指摘があるように、濃密に遺跡の分布がみとめられる地域であった。昭和54年に入り、浜松市、細江町における遺跡分布調査が行われ、都田町大字谷上に所存する安六遺跡、都田町大字吉郷に所存する椿野遺跡について都田川防災工事計画との調整が必要とされた。この結果に基づき今後の土木工事と遺跡の取扱いについて、県土木部（浜松土木事務所）、県教育委員会文化課とで協議がもなれた。この協議に基づき、下流側にあたる細江町では、町教育委員会が主体者となって、昭和56年度に川久保、森、茂塚、祝田地区を対象とした遺跡範囲確認調査を行なった。つづいて昭和56年度に森遺跡、川久保遺跡ほかの調査を実施した。

浜松市側では、昭和57年4月に財團法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所が発足したので、これに調査実務を担当させることとなった。57年度については、椿野遺跡東側部分の700m²を発掘調査することとし、昭和57年12月15日より調査に着手し、昭和58年3月26日をもって、完了した。

昭和58年度は7月20日付で委託契約が成立し、57年度の調査分を整理し、報告書を刊行すること、57年度調査分の西側600m²の発掘調査を実施することが主たる業務となった。



第1図 位置図

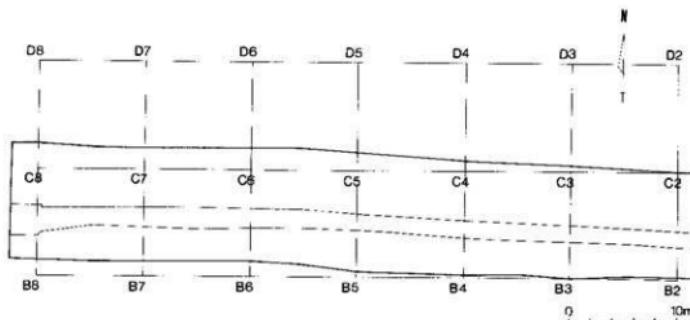
第2節 調査の方法

調査対象区は、現在の都田川堤防に平行する位置にあって、南北 10m ・東西 70m の長細い範囲である。この調査区内に磁北にあわせて基軸線をとり、原点より北へA・B・C・D………とアルファベット順に、西へ1・2・3・4………と数字をとり、各区の名称は座標方式により標示することとした。例えば、C 2 区、D 2 区等である。

本遺跡の層序は、浜松市遺跡会の調査によってその基本は把握されているので、調査区域内の全面にわたって、 sondage (表土) を重機 (バックフォー、ブルトーザー) で除去した。このうち第Ⅲ層以降、基盤層までの平面調査を実施した。

また、記録として、調査日報、調査日誌を記入するとともに、別に遺構と認められたものについては遺構カードにその所見を記入した。実測図は20分の1のスケールを原則として、詳細図の必要なものについては10分の1で汎化した。この作図にはB 3 版方眼紙を使用することとし、 $10\text{m} \times 10\text{m}$ の調査区を北半分と南半分とに2分して（例えばC 2-N、C 2-S）方眼紙2枚におさめた。

カメラは、中型カメラ、小型カメラを使用し、遺構、遺物の状態には、主として中型カメラを使用した。小型カメラはスライド及びモノクロのメモ用として使用した。



第2図 グリッド配置図

第3節 調査の経過

昭和57年12月16日～12月25日

調査に先立ち、現地にて実務を担当する浜松市教育委員会と当研究所の打合せを行なう。調査前の写真撮影・地形測量に先立ち基準杭を設定する。現地事務所設営。

昭和58年1月5日～1月9日

電機（ユンボ、ブルトーザー）による表土除去、標準点移動を行なう。

昭和58年1月10日～1年18日

排水構の土層断面を清掃し、土層観察を行なう。中世から弥生時代の各時期の堆積が確認された。中世面の調査は包含層の掘下げ、遺構面を精査から開始する。柱穴状ピット、溝状遺構、大型ピットもしくは土坑などが発見される。溝状遺構その他から、中世末とみられる施釉陶器などが出土する。

昭和58年1月19日～1月31日

井戸状遺構（S E 01）を掘り下げる。中世面の調査を完了し、全体写真を撮影する。

昭和58年2月1日～2月15日

写真撮影、遺構実測の終了した中世面西半部を掘下げる。新たに柱状穴ピットが発見され、写真撮影、補測を行なう。作業の完了した西半部の弥生時代の包含層を掘下げる。中世面東半部に発見された柱状穴ピットの写真撮影、補測を行なった。

昭和58年2月16日～2月22日

発掘区のはば中央に溝状遺構（S D 18）を発見する。覆土中より山茶碗などが出土し、遺構の年代が把握された。S D 18を完掘し、写真撮影、実測作業を行なう。上層から続いた中世から古代末期の遺構調査は終了した。

併行して発掘区西半の弥生時代遺構調査を開始。各遺構の写真撮影、実測作業を実施する。S D 17と呼称した溝状遺構から銅鏡が発見された。土器集中箇所（S X 03）の遺物出土状況図作成。

昭和58年2月23日～2月28日

S X 03 の実測作業継続。溝状遺構（S D 18）を完掘し、南・北方向から写真撮影を実施。弥生面の調査もしだいに東半部へ移り、B、C、D 6～8区の遺構検出を行なう。

28日には、浜松市木事務所、浜松市、細江町、県教育委員会、当研究所による協議を実施する。

昭和58年3月1日～3月7日

古代土師器を多量に包含する溝状遺構（S D 24）やその他の溝状遺構、ピット、土坑の精査。調査の進展について、各区に普遍的に発見された土坑にも、覆土の違いによりいくつかのバラエティがあることが判明した。

3月5日には、市教育委員会とともに現地見学会を実施し、地元住民など多数の見学者をむかえた。

昭和58年3月8日～3月28日

弥生面西半部は実測作業を継続、東半は遺構精査を行なう。S D 24では土器出土状態を撮影し、実測作業に入る。3月18日には、航空撮影、19日には、弥生面の全体写真の撮影を行なう。3月23日、本日をもって現地調査を完了する。

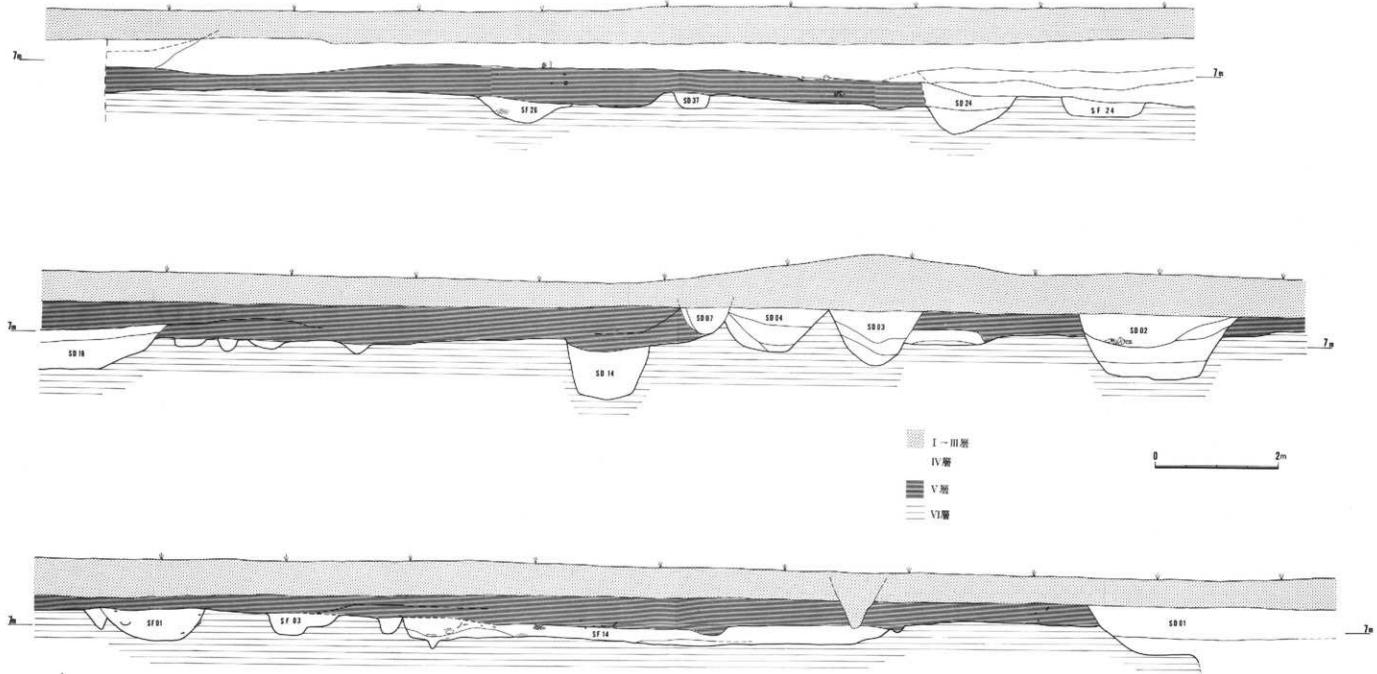
第4節 土層

今回、調査区を横断する農業用水をとりのぞいて調査用排水路として転用した際、本遺跡の基本土層を確認するため、南・北両側の壁面を清掃し、土層観察を行なった。ここでは、浜松市遺跡調査会の調査成果を継承しながら、上層を区分し、本遺跡の基本順序をつきのように把握した。
註1

- I 層 捨物造成の際の盛土
- II 層 耕作土
- III 層 黄褐色青鉄混り微砂質粘土層
- IV 層 灰黒色有機質粘土層
- V 層 黒褐色有機質混り微砂質粘土層
- VI 層 黄色斑鉄混り微砂質粘土層

なお、これらの土層に共通していえることは、わずかに砂質をおびた粘土層であることである。逆にIII層、VI層の土質は鉄分が強いこと、IV層・V層は有機質を含み還元質をおびることが差異としておさえられる。いずれにせよ、これらの土層は河川の堆積物によって形成されたことは確実とみてよいが、これらの共通性と差異が、各層の形成された時代の自然環境を反映しているものと判断されよう。なお、これら各層の文化年代は、III層以下IV層までが中世から古墳時代末、V層が古墳時代前期から弥生時代後期として把握された。

註1 浜松市遺跡調査会『椿野遺跡』1982年



第3図 植野遺跡土層断面図

第 II 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境

静岡県と愛知県にある駿ノ巣山南斜面に源を発する都田川は、流長 49.9 km を測り、浜名湖の北部、引佐細江に注いでいる。途中、井伊谷を開拓した井伊谷川などと合流する。この河川は、上流域では秩父古生層を構成する赤石山脈の南西端にあたり、久留木本、滝沢などでは岩の多い渓谷地形を形成している。下流域では占城層からなる山地と洪積世の三方ヶ原台地にはさまたった都田沖積地で西側に流れを変え、細江町との境界である瀬戸（恩塚山）を開拓して、細江町中川周辺の沖積地を発達させている。^{註1}

本遺跡は、この都田川河岸に所在するが、その周辺の地形は、都田川の流路と深くかかわっている。全体に、都田沖積地は谷底平野として形成されており、浜北市大平と接する丘陵と細江町と接する恩塚山にはさまれて小盆地地形を呈している。都田沖積地の両岸には川山から吉影の集落をのせた河岸段丘（遺跡の北側）と新木から一色の集落をのせた河岸段丘が発達しているが、いずれも幅が狭い。これら河岸段丘の下位には都田沖積地が広がっている。この沖積地内には、都田川の旧流路が認められる。旧流路は、沖積地を蛇行して流れた痕跡をとどめており、その流路の両岸には、自然堤防が認められる部分もある。なお、これら自然堤防上は、集落や畠などに利用されている場合が多い。

今回、調査対象とした地点の周辺においては、終戦後まで使用された旧堤防が一部、残存している。こうした旧河道や旧堤防から往時の都田川が、椿野付近で大きく蛇行していたことを知ることができる。椿野遺跡を考える時、こうした環境の変化をふまえなければならないであろう。

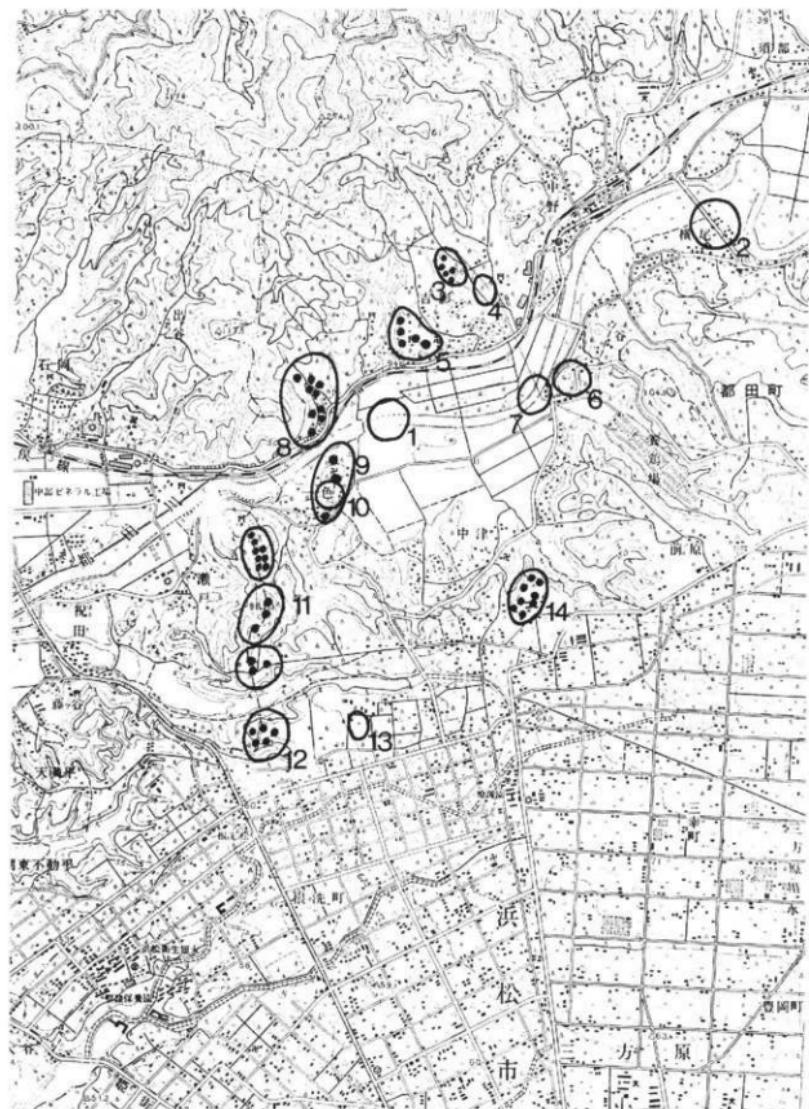
本遺跡は、沖積地の微高地や自然堤防上に立地したものと考えられる。周辺には、終戦後まで使用された旧河道や旧堤防から、往時の都田川が、椿野付近で大きく蛇行していたことを知ることができる。本遺跡の存続と断絶が、都田川の流れと深くかかわるものと推定されよう。

第 2 節 歴史的環境

(1) 原始から古代へ

都田地域の歴史は、現状では縄文時代からはじまるが、全体として遺跡は少なく、沖積地をとりまく河岸段丘上に川山、一色、向山遺跡などが分布する。川山遺跡は、古くから打製石斧、およびその未成が多く見えており、石斧製作場ではないかと考えられている。この遺跡で発見された土器は、晩期前葉、晩期末葉である。発掘調査された向山遺跡からは晩期木葉（櫛玉式）の土器棺墓が 2 ヶ所発見されている。

この地域の弥生時代遺跡は、上流側より川山、向山、椿野遺跡が確認されているが、椿野遺跡をのぞいて沖積地を見降す河岸段丘上に立地する。そのうち向山遺跡については、近年の発掘調査によって堅穴住居跡 13、掘立柱建物跡などが発見されており、比高差 20~25 m を測る段丘上の営なまれた集落であることが判明している。また遺跡からは有孔磨製石錐や打製石錐などが発見されているが、未成品も含まれているので、この集落で有孔磨製石錐が製作された可能性が高い。このほか、弥生後期の石斧も発見されている。土器は、後期前葉と後葉の 2 時期であり、在地の西遠江地方の土器に混って東遠江地方を主たる分布圏とする菊川式上器も客体的な在り方で確認されている。椿野遺跡が沖積地に立地することに比べ、向山遺跡が、段丘上に立地する点は、両者の性格を考える上で、重要な課題といえよう。さらに恩塚山をはさんだ東側細江町中川地域からは銅鐸 6 口が発見され、周辺の沖積地上に当該期の遺跡が多数分布する点は、都田地域と対称的である。このような状況の違いは古墳時代前夜における集落形



1. 植野遺跡 2. 貴元寺東遺跡 3. 吉影A群古墳群 4. 須部神社西遺跡 5. 吉影B群古墳群
 6. 向山遺跡 7. 安六遺跡 8. 吉影C群古墳群 9. 一色古墳群 10. 一色遺跡
 11. 恵塚山A群古墳群 12. 都田山古墳群 13. 坂上遺跡 14. 猿ヶ平群古墳群

第4図 周辺遺跡分布図

成の反映とみることが許されるであろう。

古墳時代に入ると、前期古墳の分布は、引佐町井伊谷地域・細江町中川地域に認められる。これらの古墳の年代的推移をみると、都田川流域における首長塚は、井伊谷から中川地域の沖積地へ移動したものと推定される。この間、都田地域では首長塚は形成されることはなかったが、台地上に板上遺跡（祭祀遺跡）が成立している。この遺跡からは、類例の少ない上製品（人形・犬形・織機形など）が発見されており、遠江では特異な木格的祭祀遺跡とされている。このような様相をもつ遺跡は、おそらく都田川流域全体の聚落を背景として成立したものとみるべきであろう。^{註3}

6世紀以降、都田沖積地を見降す位置に群集塚が形成される。その多くは、横穴式石室の円墳であるが、郷ヶ平4号墳のみが全長26mを測る前方後円墳となる。この郷ヶ平4号墳を含む小文群は、須恵質埴輪（馬・人物など）をもつ6号墳などがあり、6世紀前葉～中葉に成立した首長とその周辺につらなる人物の奥津城と判断される。戦前に発見された吉影3号墳は、本遺跡の北側に位置しこの地域において最も古く横穴式石室を採用したと考えられるが、副葬品に心葉形舟墓などを含む馬具一式をもつなど、この地域の宅庭的古墳と評価しうるであろう。近年、調査された向山22号墳～24号墳は、6～7の単位群で形成された谷上小文群の一角にある。調査されたこれらの古墳は、いずれも周溝を巡らした横穴式石室をもつ小円墳であり、7世紀代に建造されたものと推定される。^{註4} おそらく、谷上小文群の多くは、こうした様相を示すと考えられる。

なお、向山古墳群と同一丘陵で、古墳時代の住居跡9軒が発見されているが、出土遺物から6世紀中葉～後葉に営なされたものと推定された。両者の関係は、調査者が指摘するように「古墳時代の聚落に隣接して、ほぼ同時期の古墳を築造した例は、今日まで知られていない」のであるからきわめて、特異な例であろう。^{註5}

(2) 古代から近世へ

都田地域が、はじめて文字史料に登場するのは、「和名抄」の記載「京田郷」である。ほかに年次不明ながら、城山木簡にも「京田郷」がみられる。当時は引佐郡に属すとされるが、浜名郡に属した城山遺跡からなにゆえ「京田郷」の木簡が出土したかは興味ある問題でもある。その頃の遺跡としては、沖積地内に貴元寺東、安六遺跡を掲げることができるが、「京田郷」が律令制下の一郷であることや式内社須部神社の存在からすれば、本地域にいくつかの自然聚落が形成されていた可能性は強い。

その後、この地域が再び文献に登場するのは、つきの記載である。^{註6}

遠江国五十戸

都田御厨 為便補所

代米百六十三石五斗 治承主税察勘文

調絹五十疋 代五十石 傷糸百匁代十一石 中男作物油三斗五升代十石五斗 租穀二百石代七十八石

封丁二丁代十石 運賃石脚二斗 卅二石七斗

合准米百九十六石二斗

済例

保元 宣旨天可済三百七十石 治承 宣旨大可済四百七十石

抄帳伝 御上分用紙一千三百帖 中紙五百帖 具米八百五十六石運賃雜用如定 使供卅五ケ度

〔『神宮雜例集』卷第一〕

都田御厨は、以上の記載により、棚橋光男氏が指摘するように、遠江國封戸物の弁済所として國司が指定したところから出発した。その後、「永保年間以降は封戸物弁済のことなく、専ら御厨として伝

領」されたと考えられる。先の記載をみると、糸、油（燈油か）、紙という年貢米以外の負担は、この地域の生産体系を反映しているものと思われる。なおこれらの年貢は、運賃とあるように、水上輸送が推定され、都田川より浜名湖をへて輸送されたものであった。^{註9}

鎌倉幕府成立時に入部した守護安田義定の圧力によって、停廢の危機をむかえたこともあったが、史料上、室町時代まで継続していたらしく、都田川を境に、上方、下方として区分され構成されていた。

しかしながら、室町後期以降戦国時代になると、都田地域は国人領主井伊氏の勢力下に入り、御厨の機能は停止したものと考えられる。細江町蜂前神社文書によれば、都田上下給人衆とあり、井伊氏のもとで、被官する農民の存在を確認できる。^{註10}こうした国人領主下の都田地域は、村落としての組合も、潮戸、祝田（いずれも現在の細江町）に結びついていることもうかがい知ることができる。

今回の調査によって発見された遺構群も、古代末～近世初頭に当地域に生きた人々によって営なまれたことからすれば、こうした中世史の動向も無視できないであろう。

註1 静岡県編『静岡県の地質』1974年

註2 浜松市教育委員会『浜松市向山遺跡・谷上古墳群発掘調査概報』1982年

註3 向坂鋼二「浜松市都田町中津・坂上出土の祭祀遺物」『考古学雑誌』50巻1号 1964年

註4 向坂鋼二他『浜松市史』第1巻 1968年

註5 前掲書（註2と同じ）

註6 前掲書（註2と同じ）

註7 可美村教育委員会『城山遺跡』1981年

註8 名著普及会『新校 群書類從』第1巻所収の「神宮雜例集」による。

註9 棚橋光男『中世成立期の法と國家』1983年

註10 南山真助「中世伊勢神宮領庄園の年貢輸送」『人文地理』第31巻5号 1979年

註11 久保田昌希「戦国大名今川氏の徳政について」『今川氏の研究』1984年

第 III 章 弥生～奈良時代の遺構と遺物

本章では、主として弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構と遺物について報告することが、同一面で奈良時代の溝1も発見しており、さらに包含層遺物には古墳時代末の遺物もわずかに出土しているので、あわせて述べてみたい。

なお、弥生～奈良時代の遺構分布の在り方は、おおよそ、つきのようである。

調査区から何らかの遺構を伴う時期は、弥生後期前半からで、土坑や溝状遺構を中心とするものであった。とくに、調査区東側では、ピットや土坑が集中している。また、後期後半に入ると、SB 01と呼称した堅穴住居跡が西側に出現し、小規模な溝状遺構も、その周辺に削除されはじめめる。なお、この住居跡は、溝状遺構や上坑によって切られており、短期間の間に、いくつかの遺構が常なまれたと区域といえる。また、この時期に常なまれた遺構が多くみられる点では、本遺構の盛行期を考える上で無視できない。

一方、古墳時代初頭に入ると、SD 24と呼称した溝状遺構がみられるのみであり、先の弥生後期前半～後半の在り方と著しい違いをみせている。

なお、その後は、包含層遺物に古墳時代後半の遺物が若干みられるのみで、わずかに、奈良時代の溝状遺構1が削除されたにすぎない。

第1節 弥生・古墳時代の遺構

(1) 堅穴住居跡（第7図 図版3）

調査区の西側C7区から発見された。東壁についてはSD 37によって削りとられており、残存するスケールは長径4.5m、短径3.27m、深さ0.15m～0.1mを測る。形態は隅丸方形を呈している。この遺構の中央部には0.75～0.6mの範囲で焼上が認められ、炉跡と判断された。床面や壁溝の有無については明瞭ではなかった。なお、住居跡内から直径0.5m～0.4m、深さ0.5mのピットが9ヶ所発見されたが、位置も不規則で明確に柱穴とは判断できなかった。菊川式の台付鉢型上器やピットの覆上上位より銅削片が出土している。

(2) 堀立柱建物跡（第7図 図版3）

C4区において発見されたもので、一間一面の4本柱建物と推定される。柱間は東西方向で4.2～4.1m、南北方向で3.3mを測る。SD 02に中央部を削りとられている。この遺構に明瞭に伴う遺物は認められなかった。

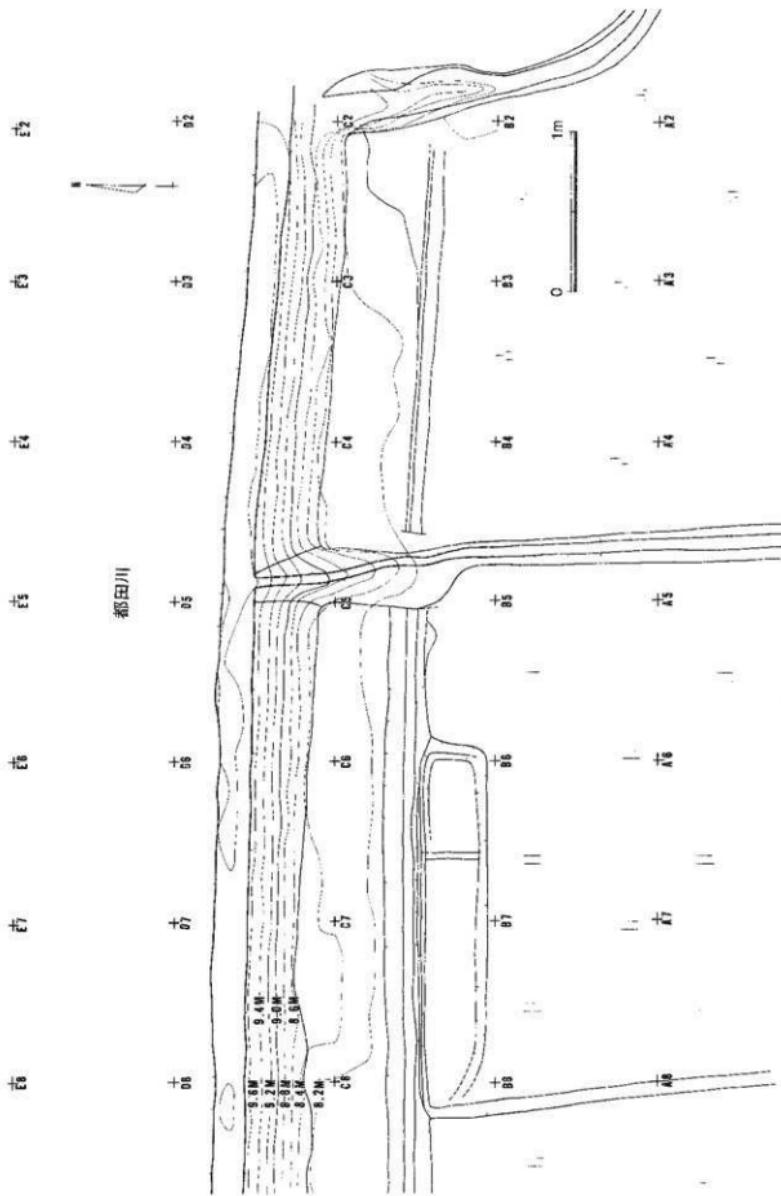
(3) 溝状遺構（第8～第11図 図版4～7）

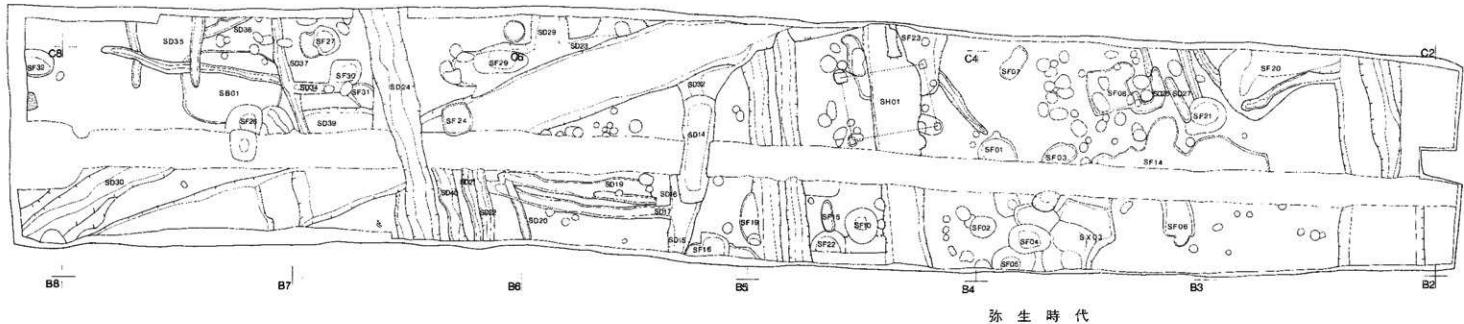
平面形態、断面形、覆土、方向によっていくつかのパラエティが認められるが、全体の傾向として、覆土はレンズ状堆積をしめし、人為的に埋められたものはきわめて少數であろうと判断された。なお、この遺構は調査区域において西側に多く認められC5区南側、C7区北側に巾の狭いものが集中している。以下、各遺構に関して記述してみたい。

SD 11 C3区より発見された。排水構によって切られており、残存するスケールは、長さ1.1m、巾0.8m、深さ0.5mを測る。覆土中位より高环脚部片が出土している。

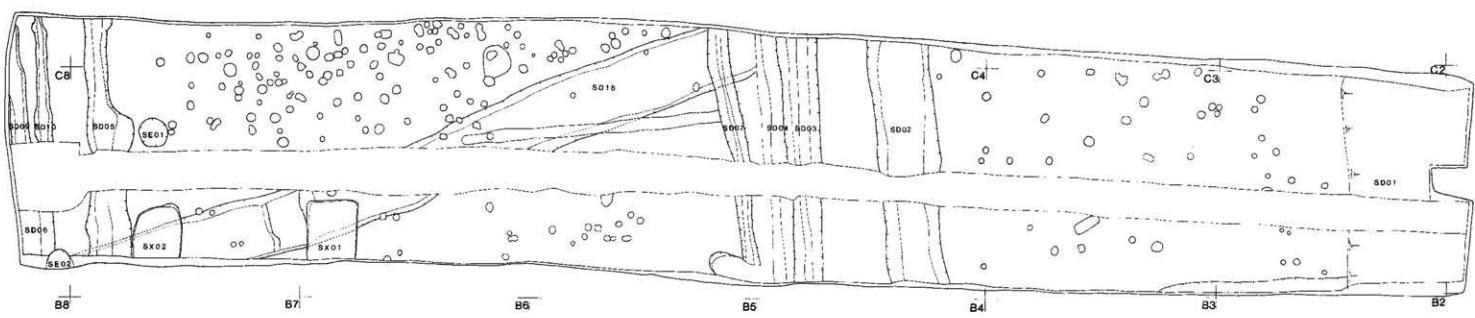
SD 14 発掘区中央C5区において発見された。ほぼ長方形を呈するプランで、長さ4.7m、巾1.5～1.4m、深さ0.9mを測り、逆台形の断面形を呈する。覆土はレンズ状堆積を示し、下位に炭化物の薄い堆積層が認められた。底面に近い位置で大形土器片が出土した。なお、本遺構の切合い関係については、SD 17(佔)→SD 16→SD 14・15(輪)となることが観察された。

第5図 桜野遺跡地形図





弥生時代



中世

第6図 植野遺跡全体図

S D 21 C 6 区から発見された。検出面では当初 1 本の溝と考えられたが、精査が進む過程できわめて接した位置にある 2 本と溝と判断されるに至り、それぞれ、S D 21・S D 22 と呼称した。南北方向を排水溝によって切斷されたり、未発掘区に延びていたので、全体の様相は把握できなかった。残存するスケールは、長さ 2.9 m、巾 0.6 m、深さ 0.3 ~ 0.25 m を測る。底面に近い位置で壺、甕、高环片が発見されているが、量的にはあまり多くなかった。

S D 22 C 6 区から S D 21 東側において発見された。S D 21 と同様、南北方向を切斷されたり、未発掘区に延びているため、全体の様相は把握できなかった。残存するスケールは長さ 2.8 m、巾 0.5 m、深さ 0.3 ~ 0.25 m を測る。東壁側に、壺、甕片が発見されたが、量的にはあまり多くなかった。

S D 23 C 5 区から C 6 区にかけて発見された。他の溝状遺構が発掘区内のほぼ東西方向、南北方向に走ることに比べ、わずかに北東方向にふれている。覆土は管鉄の発達した褐色粘土であった。南側を中世の溝状遺構によって切斷され、北側は未発掘区に延びているため全体の様相は把握されなかつたが、残存する長さは 8.5 m、巾 0.75 m、深さ 0.2 m ~ 0.15 m を測る。本遺構が S D 29 を切っているため、新旧関係は S D 29 (山) → S D 23 壴となる。出土遺物は、底面に近い位置で壺・甕類の破片が出土した。

S D 24 調査区西側部分 C 6 区において発見された。南北いずれも未発掘区に延びており、断面形は北側で U 字状を、南側では V 字状を呈する。調査範囲では全長 10 m、巾 2 ~ 1.6 m、深さ 1 ~ 0.7 m を測る。覆土はレンズ状堆積を示し、上層は暗茶褐色粘土質層、下層は暗黒色粘土層として区別できた。上器の出土状態をみると、上層では完形品、大形土器片が多数認められた。一方、下層では、これに比較して、土器の出土量は少ないという違いがみられた。なお、上層で出土した土器片と下層の土器片とが接合できた例もあって、年代にそれ程の時間差はないのではないかと判断された。

S D 25 C 3 区北側で発見された。釣針状に西側に屈曲する遺構で、最大長 1.9 m、巾 0.5 m、深さ 0.4 ~ 0.2 m を測る。底面に近い位置で大形破片が発見されたが、東側部分に集中する傾向をもっていた。

S D 26 C 3 区北側で発見された。北側部分については未発掘区に延びているため、全体は把握されなかつた。残存する長さ 1.05 m、巾 0.3 m、深さ 0.2 m を測る。甕 (15 × 10 cm) がやや浮いた状態で出土したほか、南側に土器片が集中して発見された。

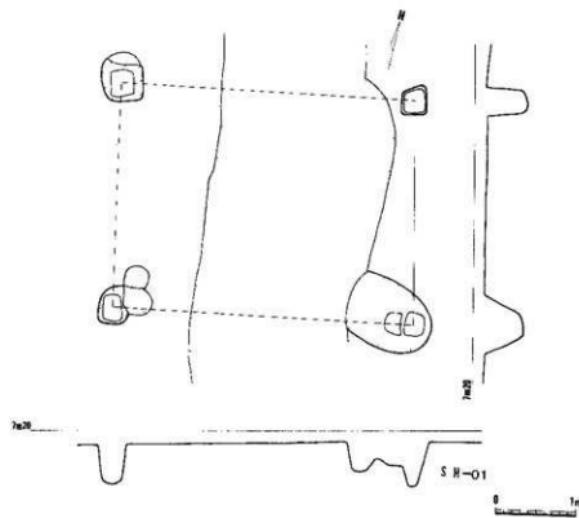
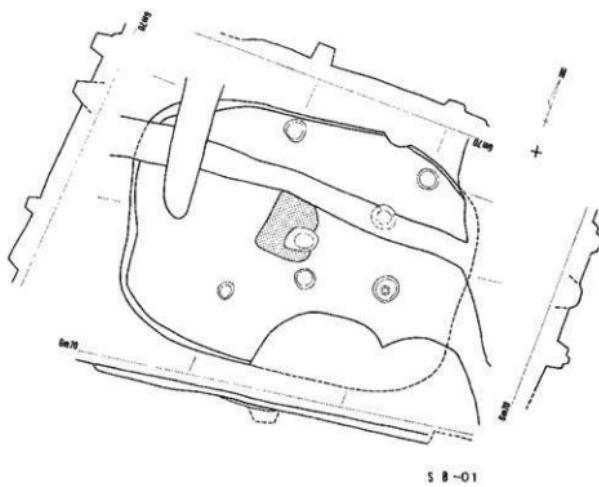
S D 27 発掘区の東側 C 3 区で発見された。残存する長さは 1.8 m、巾 0.5 m、深さ 0.25 m を測る。北側で大形土器片がまとまって出土したが、南側ではほとんど認められなかつた。なお、南側では S F 21 と切合っていたが、新旧関係は把握できなかつた。

S D 29 C 5 区において発見された。南側は S D 23 と切合、北側は未発掘区に延びているため、全体は把握されなかつた。検出できた本遺構は長さ 1.3 m、巾 1.5 m、深さ 0.3 m を測る。覆土はレンズ状堆積を示し、上位と中位に大形土器片が入っていたが、それらは接合して完形となるものではなかつた。覆土中に灰や焼土ブロックを含んでいた。

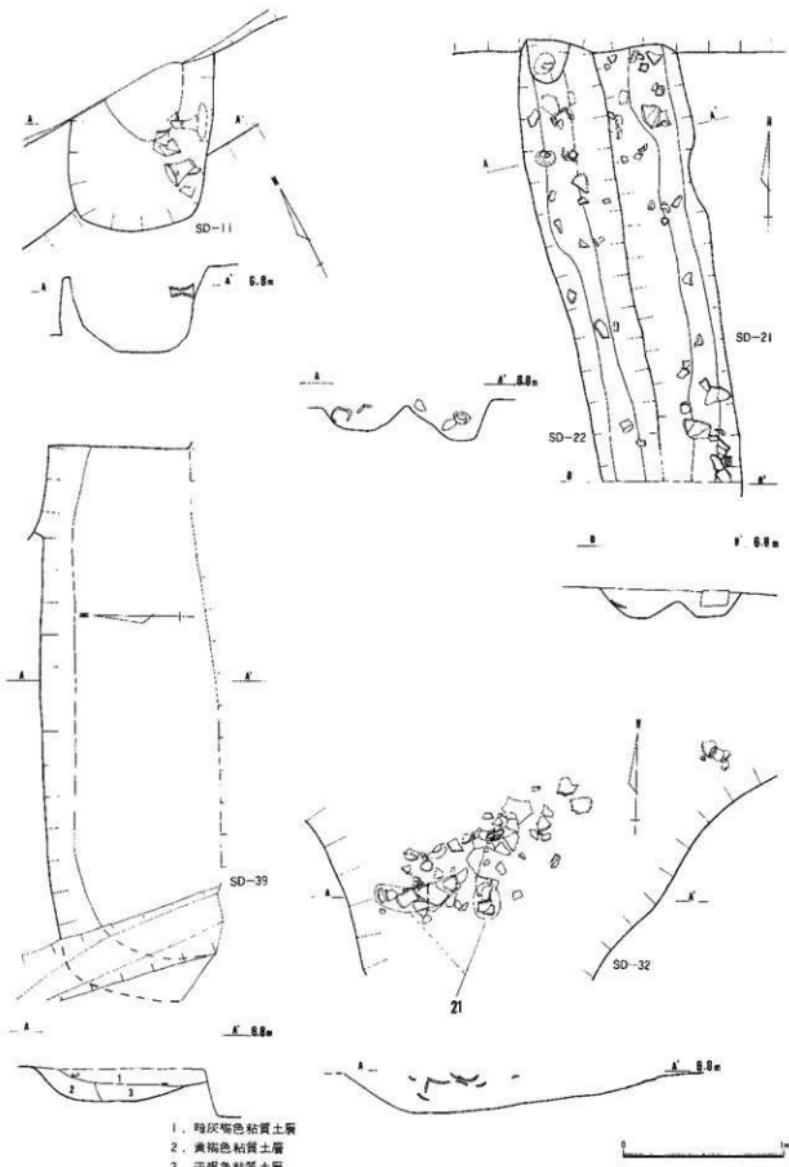
S D 30 発掘区西側 C 7 ~ C 8 区において発見された。北側を排水溝によって切斷され、南側は未発掘区に延びていた。残存していたスケールは、長さ 5.3 m、巾 2.2 m、深さ 1.3 m を測る。覆土は上層では大形管鉄が発達し茶褐色を呈しており、下層では炭火物が少量含まれ黒味を帯びていた。出土遺物は上層に多く、完成品や大形破片も含まれていた。

S D 32 C 5 区において発見されたもので北側を中世の溝、南側を S D 14 によって切られていた。残存する長さは 2.2 m、巾 1.1 m、深さ 0.25 m を測る。中世の溝に切斷されている空間を考慮すると、S D 23 と同じ北東方向に主軸をとることから、S D 23 と関係するか、あるいは同一道構である可能性も否定できない。底部よりやや浮いた状態で大形破片が集中して発見されたが、接合して完形を呈するものはなかつた。

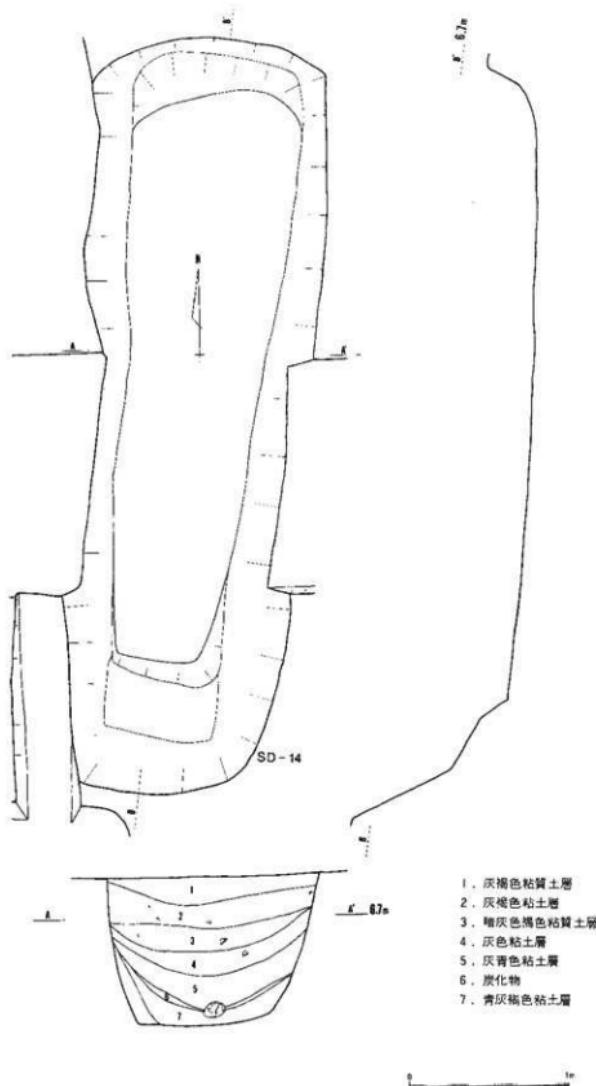
S D 39 発掘区西側の C 6 区から発見された。東、西南側を S D 24 や排水溝によって切斷されてい



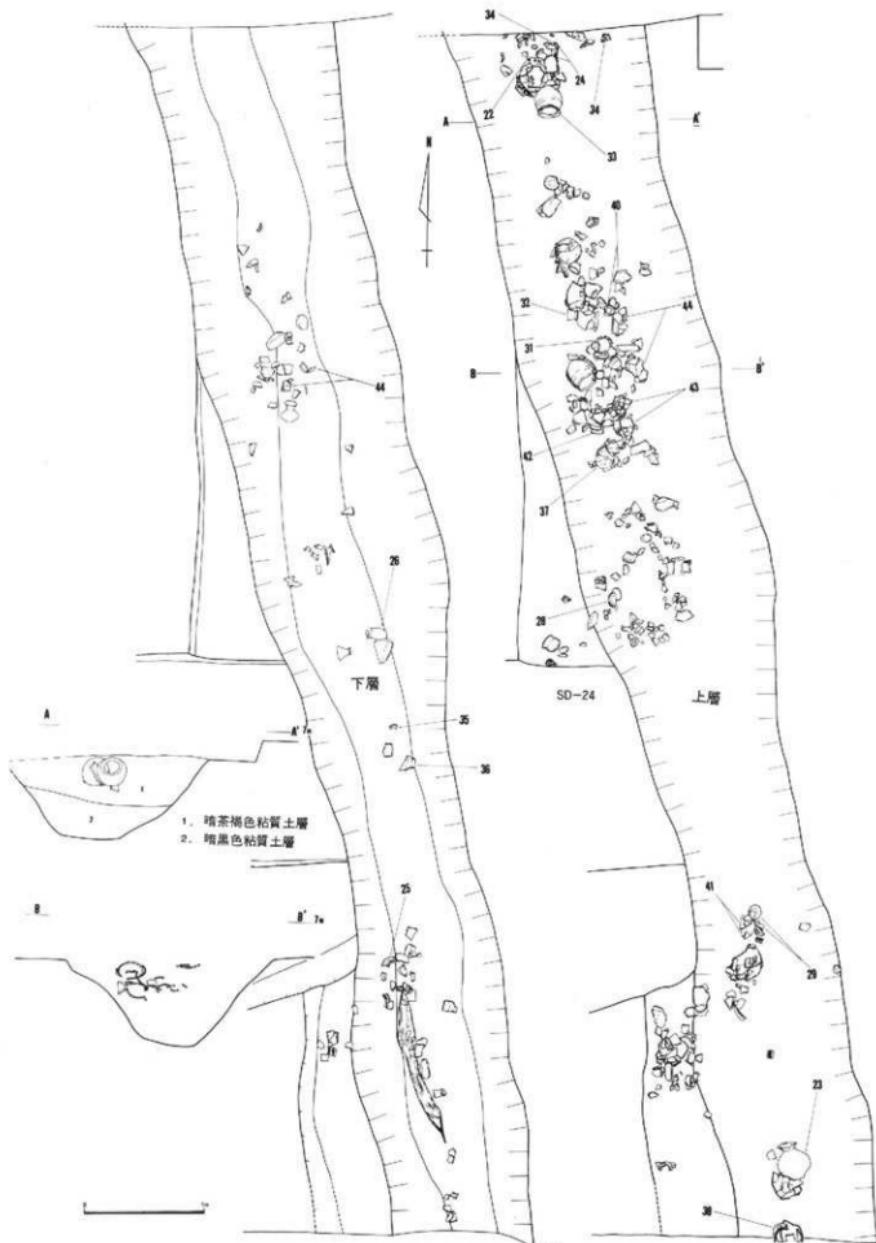
第7図 住居跡・堀立柱建物跡実測図



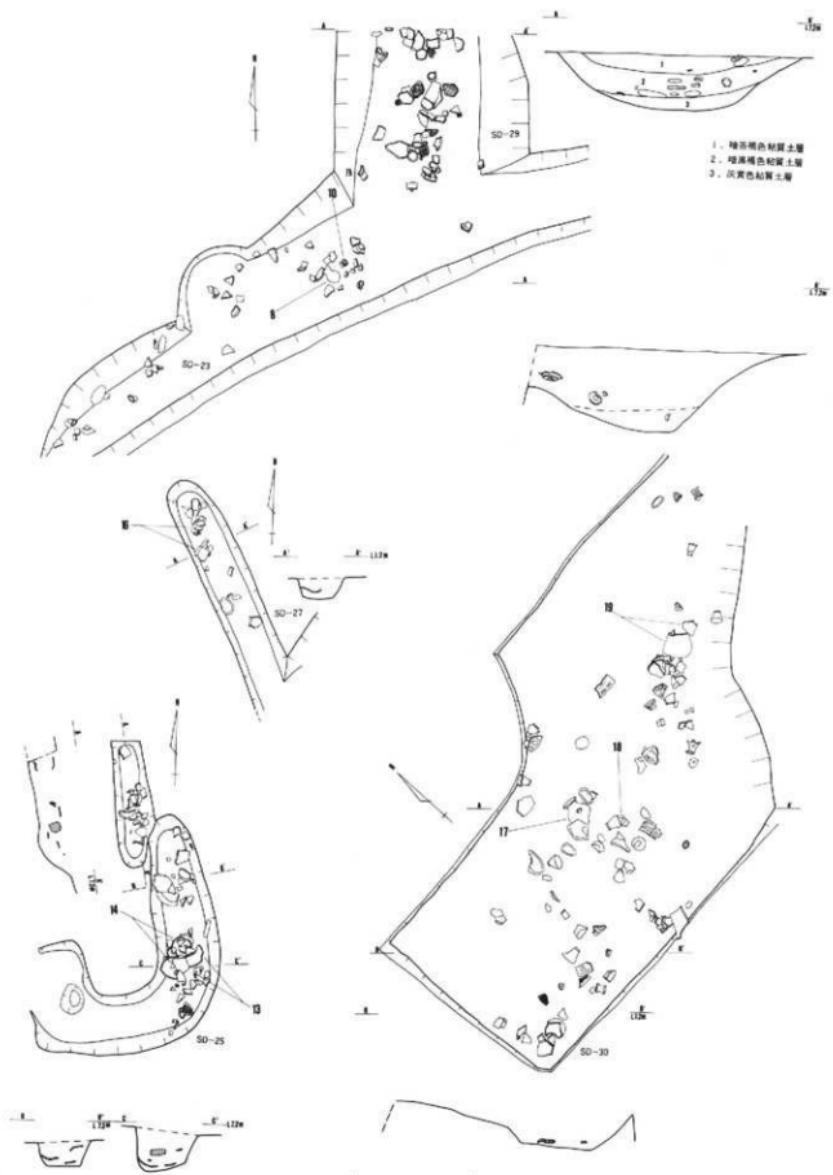
第8図 溝状遺構実測図(1)



第9図 溝状遺構実測図(2)



第10図 溝状遺構実測図(3)



第11図 溝状遺構実測図(4)

た。残存するスケールは、長さ 2.9 m、巾 1.1 m、深さ 0.2 m を測る。覆土中に細かい炭火物とともに土器片が入っていた。また、本遺構を S D 24 が切断していることから、S D 39(古) → S D 24(新)と判断された。

(4) 上 坑 (第12~第15回 図版8~10)

平面形態、断面形、覆土によっていくつかのバラエティがある。調査区内では、土坑は東側に多く、その中においても C 3 区南側、C 4 区北側に比較的集中していた。

S F 01 C 3 区において発見された。円形を呈し、残存するスケールは、1.7 × 1 m (一部欠)、深さ 0.35 m を測る。覆土には炭化物、焼土ブロック、礫とともに、高坏・壺の小破片が含まれていた。

S F 02 C 4 区から発見された。円形を呈し、1.1 × 1.3 m、深さ 0.6 m を測る。覆土は暗青灰色粘土であり、土器片が少量含まれていた。

S F 04 C 3 区から発見された。円形を呈し、1.8 × 1.3 m、深さ 0.6 m を測る。覆土中位に炭化物を含み、レンズ状堆積を示していた。土器は覆土中に少しが出土したが、接合できる資料は少ない。

S F 07 C・D 3 区の境界で発見された。隅丸長方形を呈し、長径 1.5 m、短径 0.8 m、深さ 0.1 m を測る。覆土中に炭、焼土を多量に含み、一部、焼土はブロックとなっていた。底面に近い位置で、少量の土器片が出土した。

S F 10 C 4 区で発見された。円形を呈し、1.4 × 1.3 m、深さ 0.75 m を測る。覆土上位では、礫、焼土に混って、土器片が出土した。また、底面に近い位置においても、炭化物や焼土がブロックに混じって若干の土器片が出土した。

S F 11 C 4 区で発見された。中世の溝によって東側は消滅しており、残存するスケールは 0.7 × 0.6 m、深さ 0.2 m を測るが、全容については不明であった。覆土中には、炭化物とともに若干の土器片が含まれていた。

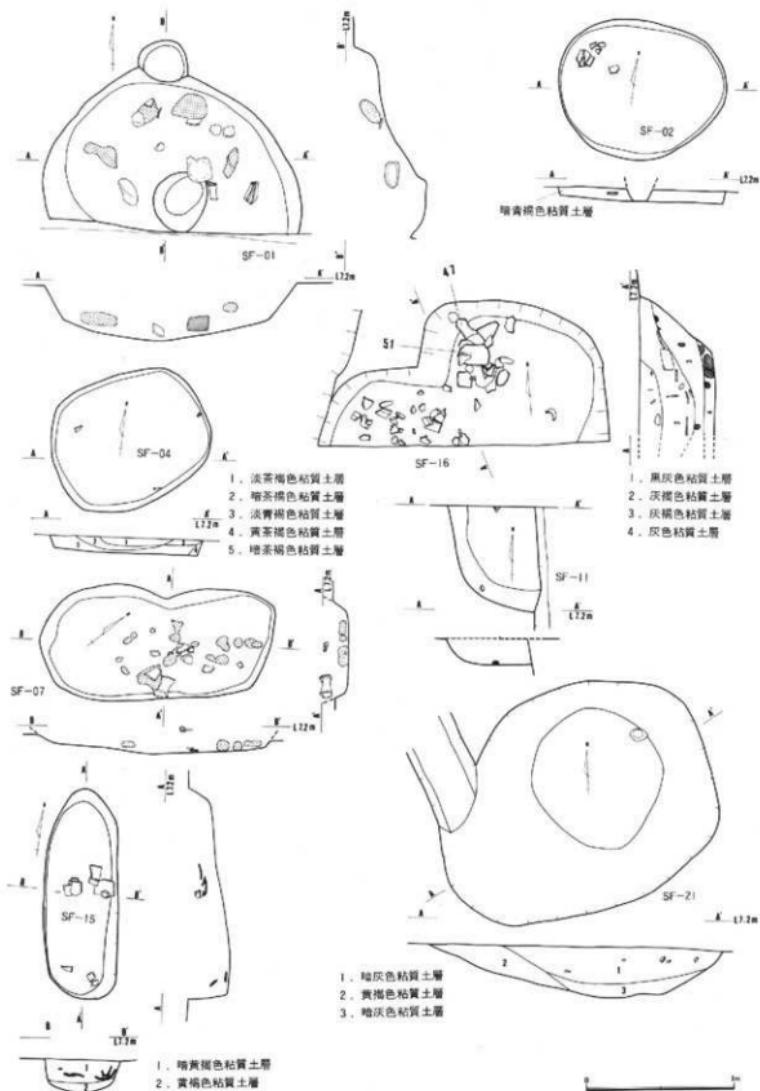
S F 12 C 12 区で発見された。長楕円形の土坑で、完掘した結果、二個のピットが重複していることが判明した。南側の土坑 (S F 12-1) は 0.9 × 0.5 m、深さ 0.15 ~ 0.1 m を測る。北側の土坑 (S F 12-2) は 1.2 × 0.6 m、深さ 0.3 ~ 0.2 m を測る。いずれも覆土中より高坏・壺の大破片が出土したが、接合して完形に近い状態になるものは少なかった。ほかに礫、焼土、炭化物なども含まれていた。

S F 15 C 4 区で発見された。南側は排水構によって切断されている。なお、当初、1 個の土坑と考えていたが、完掘した結果、直径 1.0 m、深さ 0.5 m の東側 (S F 15-1) の土坑と直径 0.5 m、深さ 0.5 m の西側 (S F 15-2) の重複と理解された。覆土中に焼土、炭化物、粘土ブロックとともに大破片を含んでいた。土器片は層位によって、上位、中位、下位として区別して取り上げたが、一部、層をこえて接合できた例もあった。なお、底面には炭化物が入っていた。

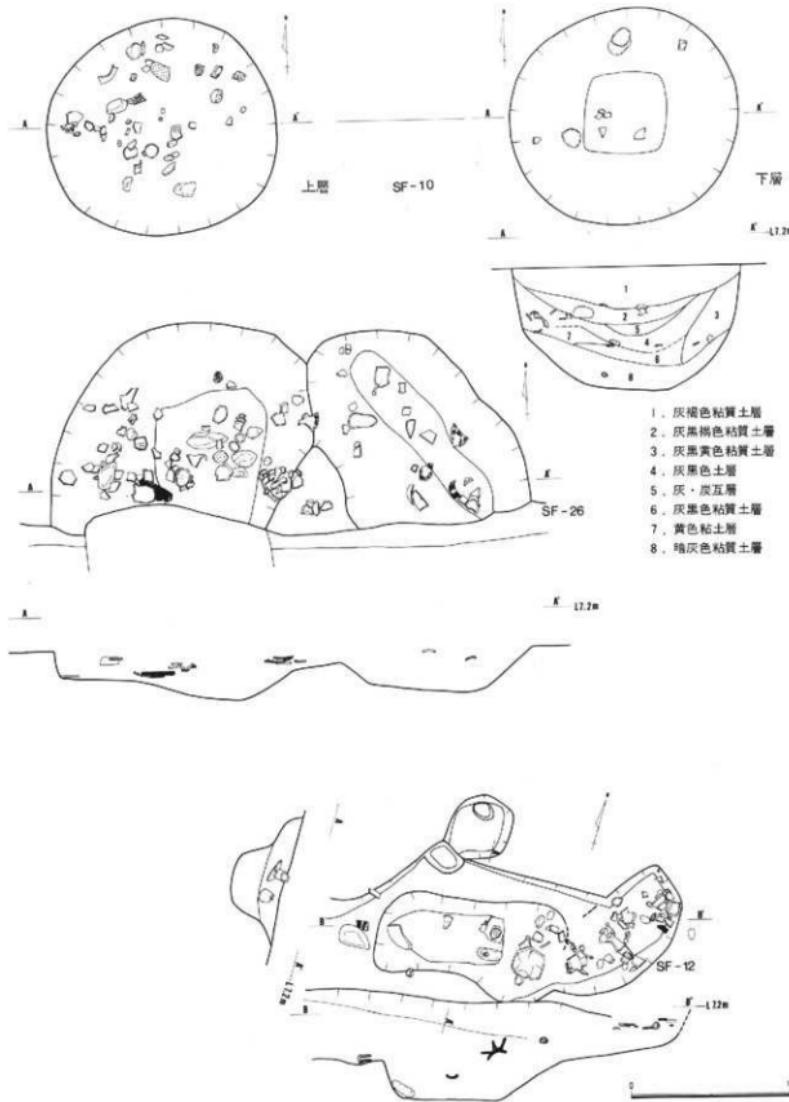
S F 19 C 5 区で発見された。東側を中世溝によって切断されているが、残存部をみると楕円形を呈していたものと判断される。長径 2.5 m、深さ 0.1 m を測る。覆土中には焼土、炭化物も含まれておらず、土器片もきわめて少なかった。

S F 20 北側が未発掘区に延びているため、全体の形態は不明瞭であるが、残存する形態は略隅丸方形を呈する。スケールは、南北の一部 2.7 m、深さ 0.3 ~ 0.15 m を測り、底面は一定していない。本遺構の南東側に巾 0.4 m、深さ 0.1 m の小溝があるが、本来、本遺構に伴うものかどうか明確にしなかった。覆土中に 20 ~ 15 cm 大の礫や焼土ブロック、炭を含んでおり、若干の土器片が出土した。本遺構は S D 27 と接合しているが、新旧関係は不明であった。

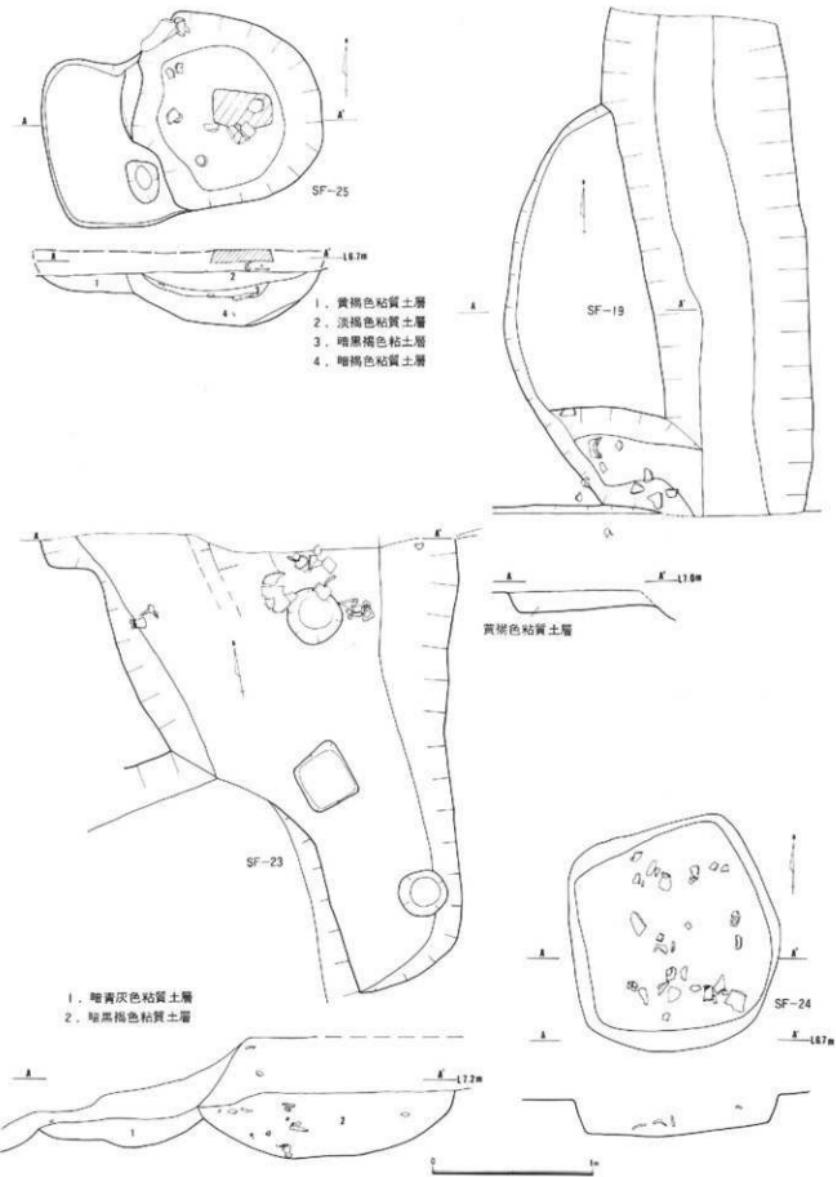
S F 23 C 4 区で発見された。西側は中世溝に切断され、北側は未発掘区に延びているため、全体の形態は把握されなかったが、略長方形を呈するものと推定される。残存長で南北 2.7 m、東西 1.7 m、深さ 0.4 m を測る。覆土中に炭化物、焼土ブロック、人形土器片を含んでいた。



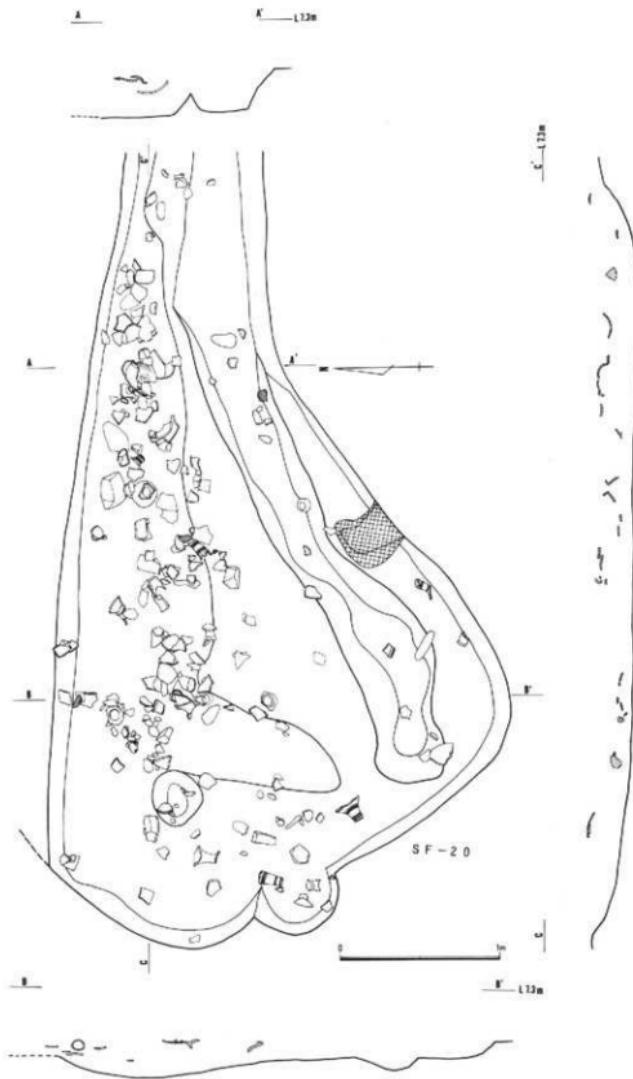
第12図 土坑実測図(1)



第13図 土坑実測図(2)



第14図 土坑実測図(3)



第15図 土坑実測図(4)

S F 24 C 6 区で発見された。中世溝で上部を削平されていたが、形態はよくとどめており、隅丸方形を呈していた。残存部のスケールは長径 1.4 m、短径 1.3 m、深さ 0.25 m を測る。覆土中に焼上、炭化物は含んでいない。大形土器片が出土しているが、接合して完形になるものは認められなかった。

S F 25 C 6 区・C 7 区の境界で発見された。直徑 1.2 m、深さ 0.4 m を測り円形を呈する。上面に焼上(厚さ 10 cm) が認められ、覆土には炭化物を含んでいた。大形土器片が少量発見されているが、接合して完形を呈するものはなかった。

S F 26 当初、単独の土坑と思われたが、完掘の結果、2 個の土坑の重複と判断された。北側の土坑(S F 26-1) は排水溝によって約半分が切斷されているが、残存するスケールは 1.7 × 1.1 m、深さ 0.3 m を測る。南側の土坑(S F 26-2) は底面に近い部分が残っており、残存するスケールは 1.5 × 1.0 m、深さ 0.25 m を測る。いずれも円形を呈するものと判断された。両者の切り合は明確にしえないが、土器片などの出土状態からすれば、北側の土坑が新しい時期ではないかと推定される。覆土中に炭化物、焼上、磚とともに大形土器片が入っていた。

(5) ピット群

約 160 個のピットが発見されたが、そのうち、C 3・C 4 区付近にその多くが集中している。スケールの点では長径 0.6 ~ 0.4 m、短径 0.4 ~ 0.2 m、深さ 0.3 ~ 0.2 m を測るものが多い。

(6) その他の遺構(図版 II)

S X 03 C 3 区では S X 03 と呼称した浅く不定形の土坑に土器片を括投棄した遺構が発見された。これらの土器片を取上げた結果、その下より 3 個のピットが発見された。なお、覆土には炭化物、焼土もわずかではあるが含まれていた。土器片は堆積状況に基づき、上・中・下層として取り上げたが、これらは、層を超えて接合できた例もあり、ほとんど時間差は認められないと判断された。また、接合して、完形、半完形となる例は少なかった。

第 2 節 奈良時代の遺構

S D 13 C 4 区で発見された。S F 23 によって北側を切斷されているが、残存するスケールは長さ 3 m、巾 0.75 m、深さ 0.1 m を測る。底面から須恵器片が発見されている。

第 3 節 出土遺物

57 年度の発掘調査における出土遺物は整理箱 120 箱におよんで、その内容は弥生土器(一部古式土師器を含む)、須恵器、土師器、中世土器、陶器、土製品、石製品、銅製品、鐵製品、木製品等となるが、このうち、弥生土器が大きな比率をしめる。これらの弥生土器の全容についての分析検討は次年度以降としたいが、本報告書においては遺構出土の土器で、一応復元可能なものを中心に報告したい。また個々の上器についての観察は別表に掲げた。

(1) 弥生土器・土師器(第 16~第 22 図 図版 18~23)

S D 11 出土土器(6) 無文の小形壺で、胴径に比較して口徑の広いわゆる広口壺である。ヘラ磨き調整を多用する、底部をわずかに凹み底につくるなど、やや新しい要素が認められることから伊勢(伊勢)の新しい時期~久山期の土器としてとらえることができる。^{註 1}

S D 14 出土土器 壺はおり返し口縁のものと單純口縁のものが認められる。いずれも胴部以下が欠損して詳細は不明であるが、肩部に穴帯をつけているものもある。高壺は壺部中位で膨出しだしく外反する器形で、手描きの櫛描波状文を施す。その他の器種は口縁部を幅広くつくって刺突による羽状

文を施した鉢がある。これらの特徴によって寄道（伊場）期の上器、欠山期の土器が含まれているものとしてとらえることができる。

S D 15 出土土器(7) オリ返し口縁で下脚部以下は欠損して不明である。口縁部には細かい波状文が施され、脚部上位には櫛描波状文と横線文を施している。欠山期の土器と判断されよう。

S D 17 出土土器(12) 直立気味の口頭部と球形の脚部をもつ器形で底部は凹み底につくっている。欠山期、もしくはその直後の土器と判断されよう。

S D 23 出土土器（8～11） 単純口縁で口頭部がゆるやかに外反する壺と肩部から口頭部が大きく外反する壺がある。前者はヘラ磨き調整し無文である。後者は脚部上位に横線文と櫛による刺突文を施している。ほかに小形壺があるが、この壺は口頭部が短く直立気味である。やや新しい要素が認められるものの欠山期と判断される。

S D 25 出土土器 単純口縁の壺で下脚部に最大径をもつ。文様は横線文と円弧文を組合せたものと竹管による爪形文を施すものの両者がある。円弧文を文様構成の一部とする点は古い要素であるものの全体として欠山期の土器としてさしつかえないと思われる。

S D 27 出土土器 「く」の字に外反する口縁部で端部に刻み目をもつ。脚部外面は単位の短い横ハケ調整が施されている。下脚部以下は欠損しているが、器形から台付壺と判断される。寄道（伊場）～欠山期の土器と判断される。

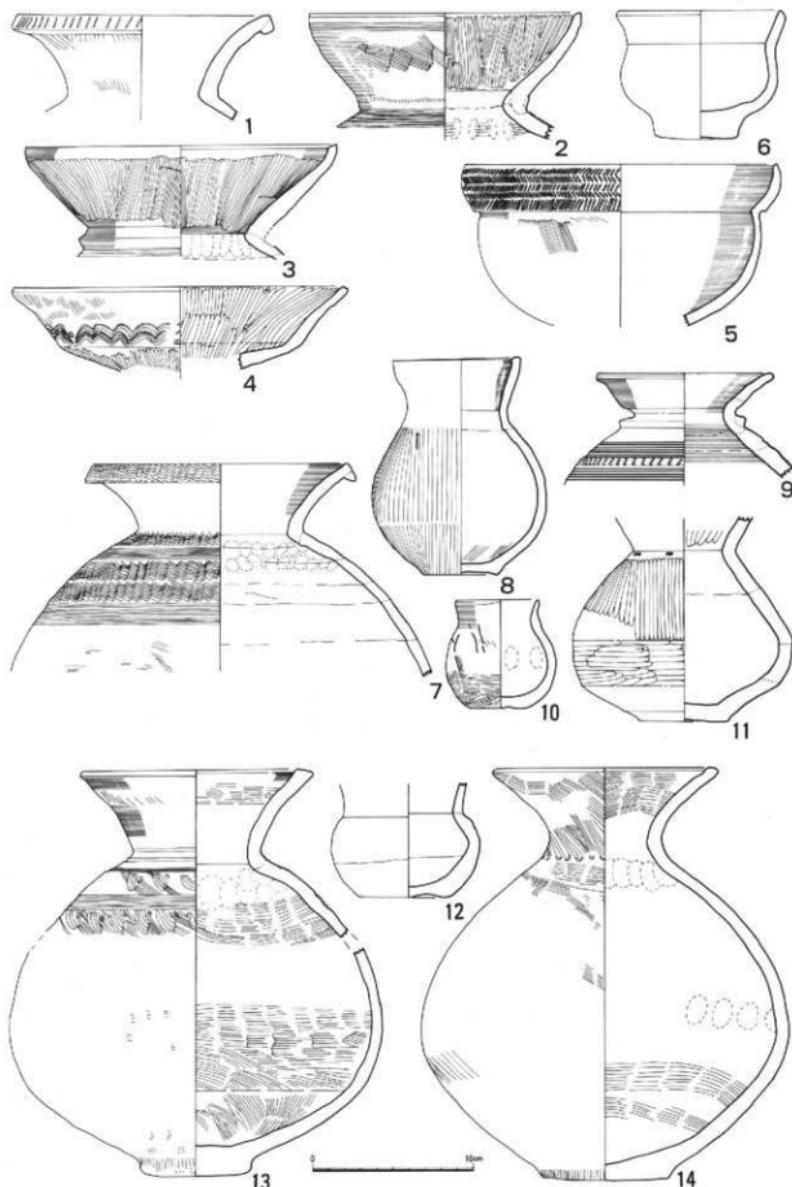
S D 29 出土土器(15) 受け口状に内凹させた口頭部で脚部以下は不明である。肩部に横線文を施す。また口端部内にヘラによる刺突文を施している。器形上、こうした受口状口縁をもつ壺は古いタイプに多いので、寄道期に比定したい。

S D 30 出土土器（17～19） 壺は短かい口頭部で球形の脚部をもち、底部は上げ底につくっている。壺は口縁部を「く」の字状に外反させ、端部下位に刻み目をもつなど全体として欠山期、もしくはそれ以前の時期に比定させたい土器群である。

S D 32 出土土器(21) 坏部が深く大きい形態で、坏部下位に陵をもつ。坏部外面ともヘラ磨き調整され、美しく研磨されるなど、欠山期の高坏の特徴をもっている。

S D 35 出土土器(20) 短かい口頭部で、下脚部が無花果状に張る形態である。類例はほとんど知られていないので時期については不明であるが、ここでは単に弥生後期（寄道〔伊場〕、欠山期）の土器と判断しておきたい。

S D 24 出土土器（22～24） 壺は大・小の規格の差がある。大形壺については単純口縁の複合口縁がある。脚部については遺存例からすると球形を呈するものが多い。文様は施されない例が多く、全体に簡素化された印象を与える壺が多い。高坏は坏部が深く大きい器形で、3孔を脚部につける。全体にヘラ磨き調整で研磨されるほか、文様は施さない。壺は台付と無台のものがある。いずれも口端部に刻み目をもつものはきわめて少ない。台付壺では「く」字口縁と「S」字口縁の両者があるが、全者が主體をなす。「S」字口縁壺は、口縁部の腰も鋸どく屈曲する。脚部上位のハケ調整は横位のハケ調整が粗く縦位のハケ調整を消す。全体でていねいな造りとなっている。無台壺は脚部が球形を呈するものと下脚部の張ったものの両者がある。その他の器種では小形鉢があるが、口端部を内凹させたものと、口縁部下位に陵をもって外反されたものがある。いずれも底部は凹み底をつくっている。これらの上器群は全体として欠山期の範疇に入る土器であるが、一方では欠山期の土器の細分が提唱されている今日、その中で S D 24 の土器群をどこに位置づけるかは重要な課題である。この状況の中で本例は器種構成や無文化の進んでいることなどの点を重視し欠山期のうちでも新しい時期のものと判断しておきたい。また、器台や小形壺などさらに次の時期の新しい要素も認められず、「S」字口縁壺は定形化された大參義一氏分類 b 類では古いものといえる。なお、この点は弥生土器と古式土師器の境界領域にまでおよぶ問題であ



第15図 亦生土器実測図(1)

り、今後の課題としたい。

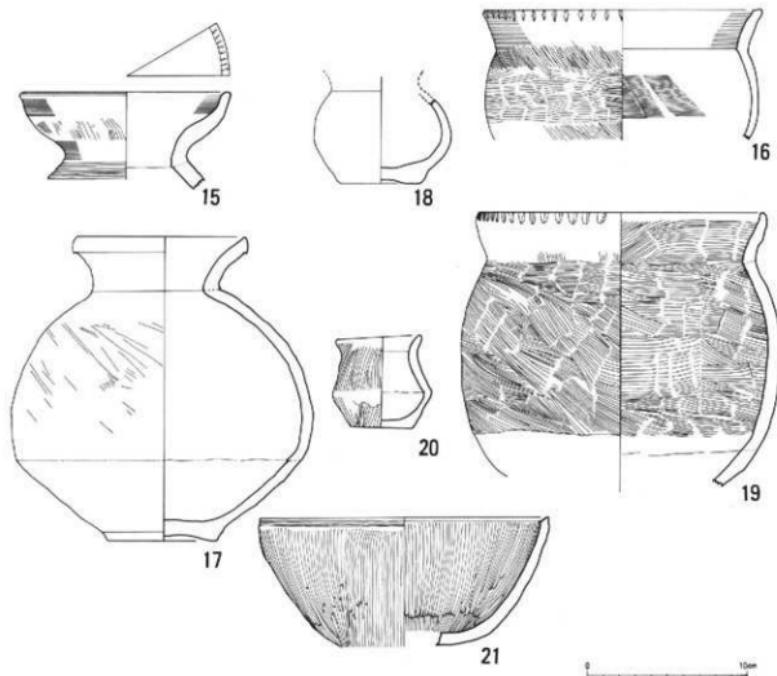
S F 16 出土土器（45～54）　これらの土器は土杭内の大破片から抽出したものである。このうち45のおり返し口縁で櫛による刺突羽状文の壺は東遠系の菊川式土器であるが、他は在地系土器と考えられる。高坏をみると、坏部下位に屈曲部をもち、上位に手描きによる横描波状文を施すなど。寄道（伊場）式土器といえるものと、脚部のみでも、それ以降と欠山式土器といえる高坏が併存している。この土杭の土器は両者がきわめて近接した時期といえる。

S X 03 出土土器（55～60）　S X 03 遺構は3個の土坑上の低平な凹地に廃棄された土器群といえる。55の壺は東遠系の菊川式土器であるが、その他の壺は欠山式土器といえる。その他の器種についても欠山期の土器と判断される。

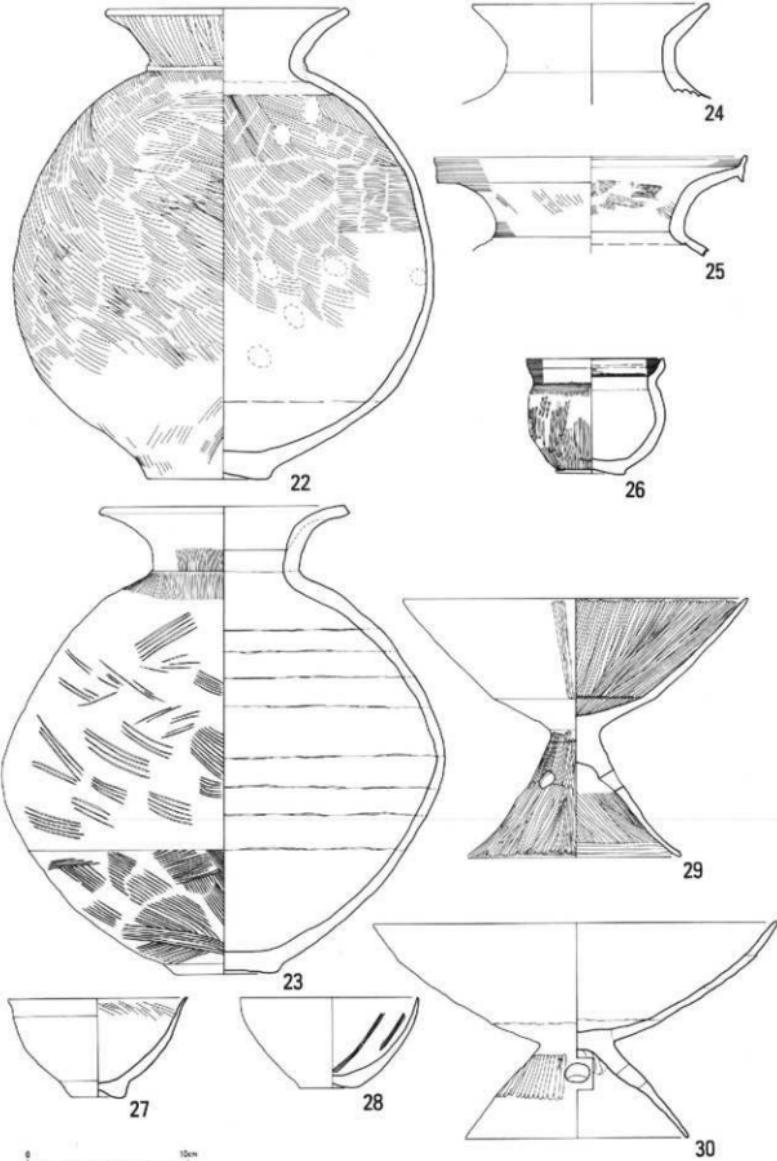
包含層出土土器（61～64）　包含層出土土器についても完形もしくは大形破片を中心に図示した。これらの土器は遺跡經營の時期を知りえるものである。その多くは寄道（伊場）～欠山期で、それ以降の土器は全体として少なく、遺構出土土器群の在り方と矛盾しない。

(2) 古墳時代の土師器

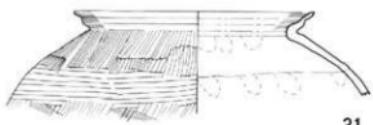
包含層出土土器（77）　このほかC 3 区包含層から出土した長胴甕は内部にボタン状つまみをもつ須恵器蓋が入っていた。遺構に伴なわない単独出土例であった。



第17図 弥生土器実測図(2)



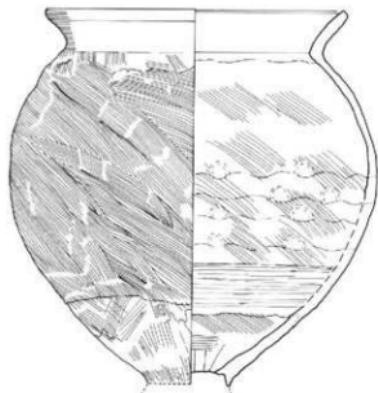
第18図 弥生土器実測図(3)



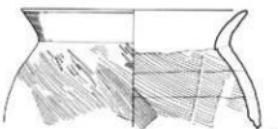
31



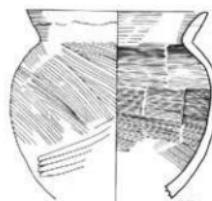
32



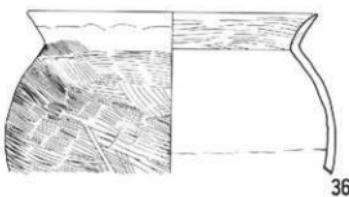
33



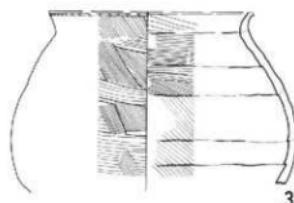
34



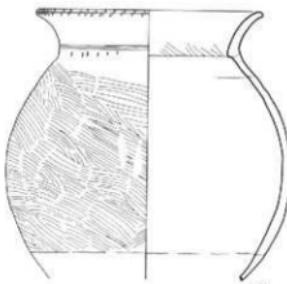
35



36



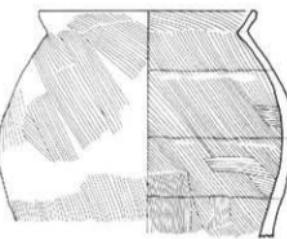
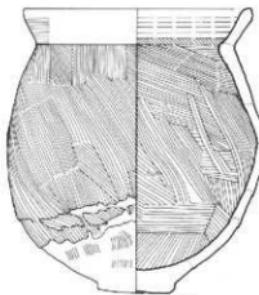
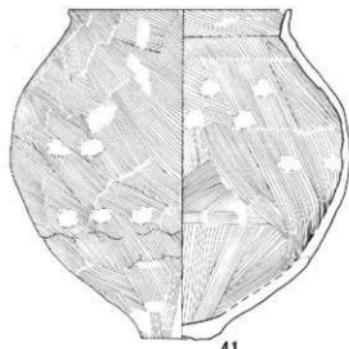
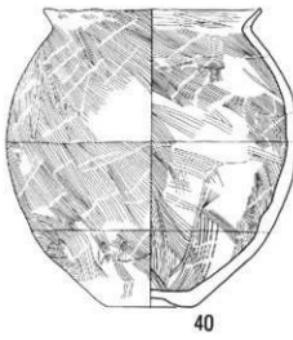
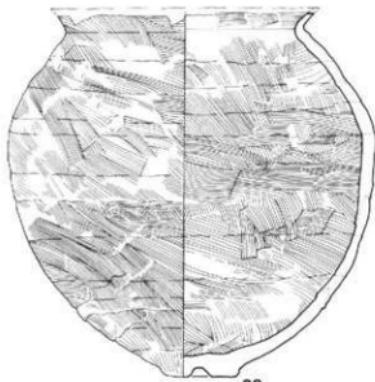
37



38

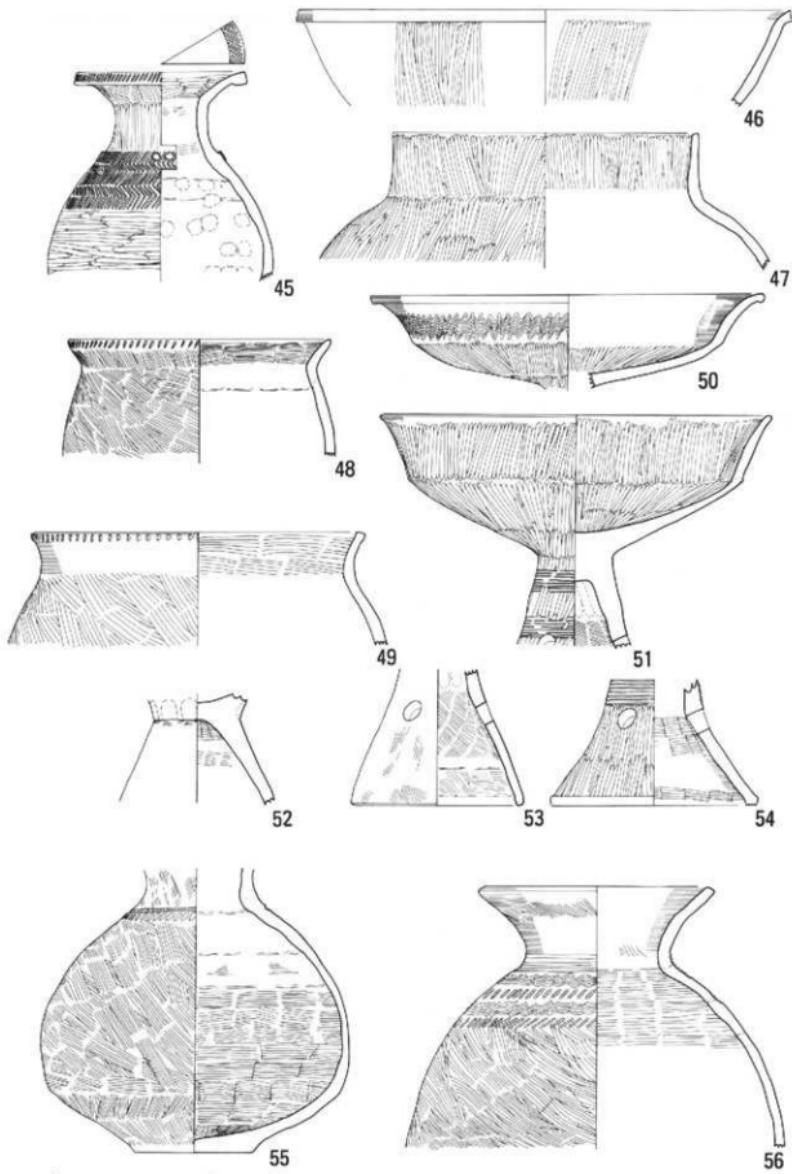
A scale bar ranging from 0 to 10 cm, with markings at 0, 5, and 10.

第19図 弥生土器実測図(4)



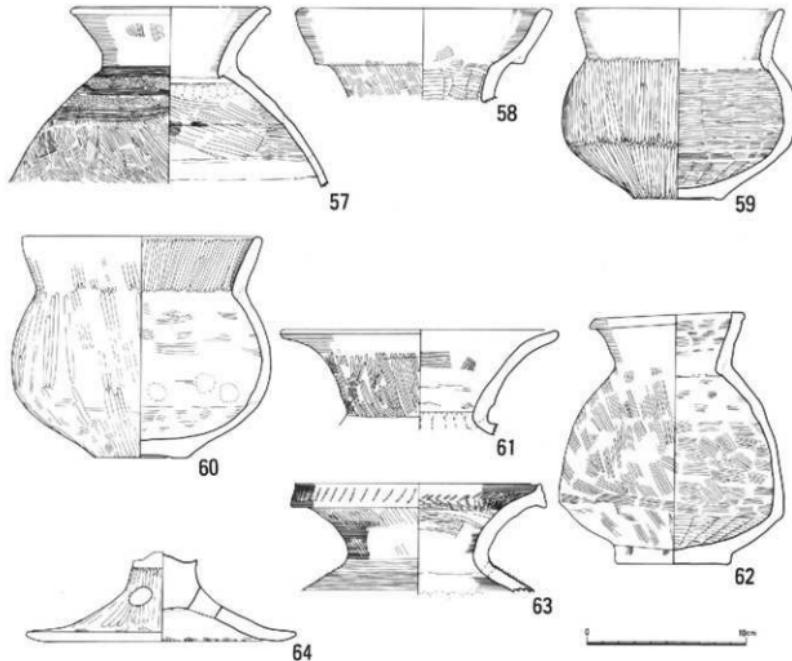
10cm

第20図 弁生土器実測図(5)



第21図 弥生土器実測図(6)

註1 弥生土器の分析にあたっては、浜松市遺跡調査会『椿野遺跡』1982年の欠山(椿野)式土器の概念を参考とした。



第22図 弥生土器実測図(7)

第 IV 章 中世の遺構と遺物

本遺跡においては、奈良時代以後、時間的な空白がみられ、その後、再び何らかの遺構・遺物を伴う時期は、平安時代末期に入つてからである。この時期の遺構としては、発掘区の北東から南西方向に発見された溝状遺構（SD 18）であるが、このほか、C 3 区・C 6 区・C 7 区で発見された柱穴群の一部が、この区域から発見された遺物によって当該期に入る可能性をもつてゐるが、検討材料が少ないので、可能性の指摘だけにとどめておきたい。

つきに S X 01、S X 02 と呼称した小堅穴遺構は、SD 18 が埋まつた段階に形成されている。このほか、SD 02、SD 03 の溝状遺構の覆土中より、山茶塹が発見されていることから、C 3 区で発見されている柱穴群の一部についても、平安末から鎌倉期である可能性をもつてゐる。

再び、今回の調査区に遺構群の形成されるのは、中世後期～末期のいわゆる戦国時代に入つてからであり、井戸、溝状遺構などが発見されている。おそらく、中世遺物の中では、比較的、多くの遺物が発見されているので、C 6 区・C 7 区の柱穴群についても、明確な時期決定はできないものの、その多くは当該期に形成された可能性が濃厚ではないかと考えられる。

また、それ以降の遺構については、発掘区の西端において発見された溝状遺構があるが、Ⅲ層下部ないしⅣ層上面を検出面としており、明らかに中世末期の遺構の埋まつた段階でつくられた遺構である。この遺構については伴出遺物も出土せず明確な年代を把握できないので、単に近世以降と考えておきたい。このように、中世の遺構と遺物は、今回の調査区域において、時期的に空間の利用状況に差異が認められる傾向が指摘できる。

第 1 節 遺 構

(1) 溝状遺構（第23・24図 図版14）

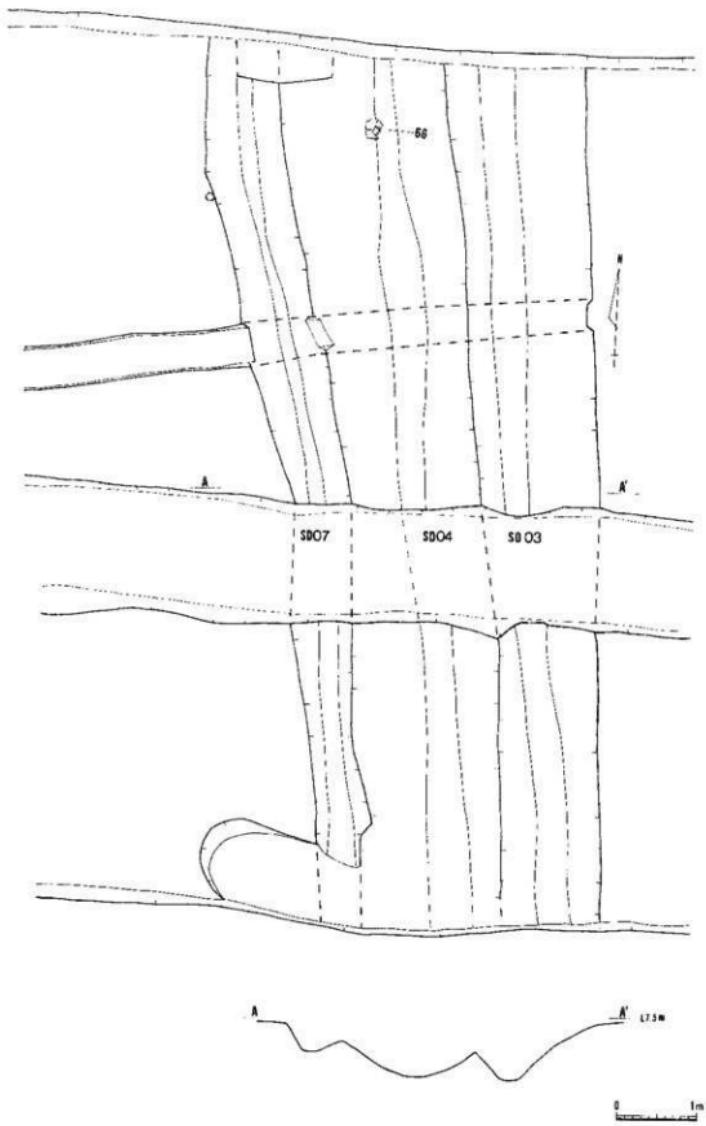
SD 18 D 4 区から C 7 区の間を北東方向から南西方向に走り、検出した長さは 26 m、巾 3 ~ 2.6 m、深さは 0.6 ~ 0.15 m を測る。覆土は、褐色もしくは褐灰色粘土層で、上位ではわずかに青味をおびる部分があった。また、下位では、砂と粘土の互層となる部分があつて、この溝は、一時、流水があったものが、埋没時には湿地状を呈していたと推定される。なお、上位では覆土中に粘土ブロックが含まれ、さらに弥生土器片も含まれているので、埋められ整地された可能性もある。底面に近い位置から山茶塹が発見されている。

SD 02 C 4 区からほぼ東西方向に走り、検出した長さ 10 m、巾 2.6 m ~ 2.5 m、深さ 1 m を測る。西側については、覆土中位において、径 25 ~ 15 cm 大の礫が一定のレベルにおいて発見された。その礫の含まれる層については、明褐色粘土層をあたかも切り込んでいるような状況が認められるので、SD 02 が埋没した段階に改修し、礫を敷き暗渠としたものと推定される。施釉陶器、機織具の大杼、籠、丸木柱が出土している。

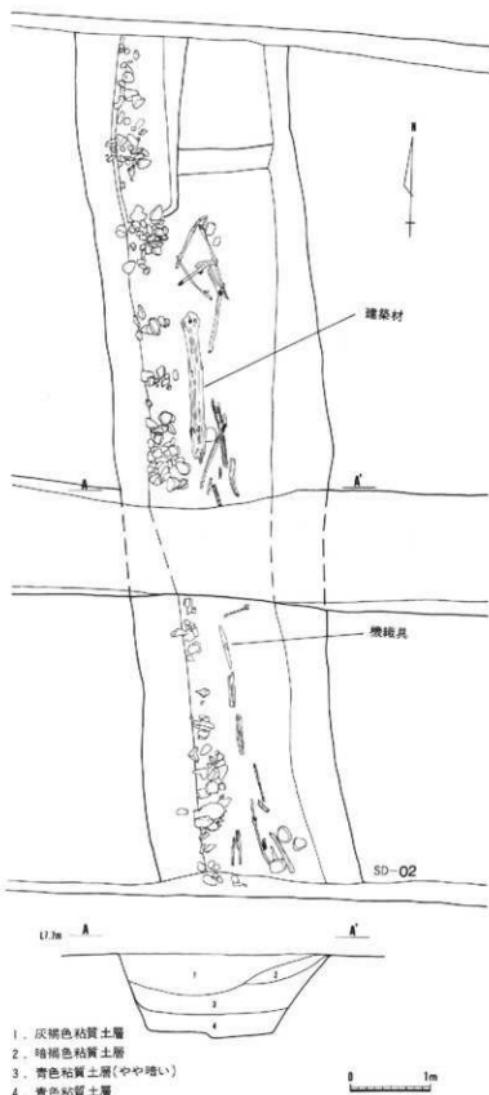
SD 03 C 4 区から SD 04 と切合っているが新旧関係については把握できなかった。検出した長さは 10.3 m、巾 1.5 m、深さ 0.85 m を測る。断面の形態は U 字形を呈する。土鍋等が出土している。

SD 04 長さ 10.2 m、巾 1.55 m、深さ 0.7 m を測る。西側を SD 07 によって切られており、SD 04 が古、SD 07 が新という関係が認められた。底面は平坦で、壁面は鋭く立ち上がる。占彌戸仏向瓶、青磁蓮弁文碗等が出土している。

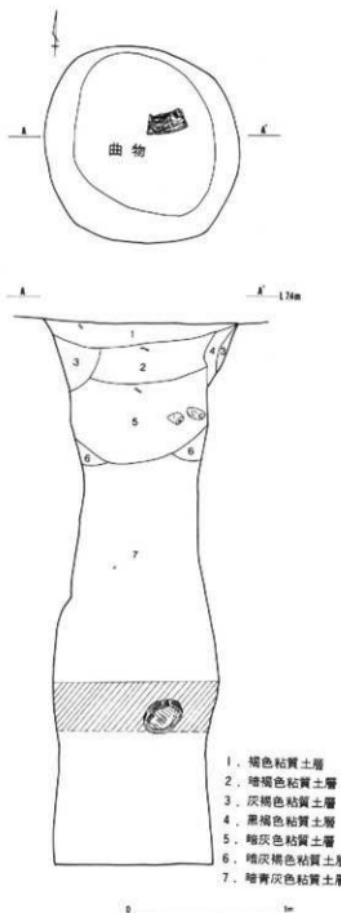
SD 05 発掘区西隅において検出された。発掘区内では長さ 10.1 m、巾 1.9 ~ 1 m、深さ 0.5 m を測る。西側壁面に径 10 cm 前後の円礫が集中して発見されたが、覆土上位よりの出土であつて底面から



第23図 溝状造構実測図(5)



第24図 溝状遺構実測図(6)



第25図 井戸状遺構実測図

遺離していた。古瀬戸四耳壺、土鍋等が出土している。

S D 06 発掘区西南において発見されたが、大半が発掘区南側に延びており、北側で発見された S D 09、S D 10 の関係も判明しなかった。

S D 07 C 5 区において S D 04 を切ってつくられている。長さ 10 m、巾 0.35 m、深さ 0.45 m を測る。

S D 09・10 発掘区西北にて発見された。いずれも、5.5 m ~ 5.0 m、巾 0.4 ~ 0.2 m、深さ 0.25 ~ 0.15 m を測る。南側の S D 06 との関係は明確ではなかった。

(2) 井戸状遺構 (第25図 図版15)

S E 01 C 7 区において発見された。直径 1.22 m、底径 0.9 ~ 0.7 m、深さ 3.35 m を測る円筒形の素堀り遺構で井戸と考えた。地上施設については、注意して発掘したが、明らかではなかった。覆土は還元質の青色ないしは暗青灰色粘土で、曲物、漆器片口挽、陶器などが出土している。底面に近い位置で、1 本の竹が斜めに入っている、井戸埋めの儀式に関係する可能性もありうるものと考えられた。

S E 02 発掘区西南隅において発見されたが大部分が発掘区外に延びているところから、全体の様相は把握されなかった。覆土中より常滑焼壺片 (N 字状口縁の退化型式) が出土した。

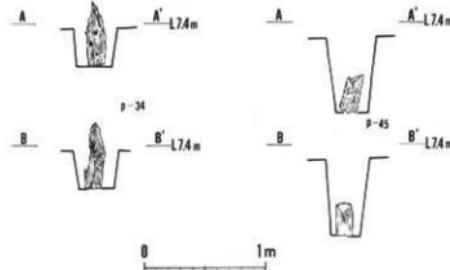
(3) 柱穴、ピット群 (第26図)

直径 30 cm ~ 20 cm、深さ 70 ~ 20 cm を測るもので、隅丸方形、円形を呈するなど、多少の差異が認められる。この中に柱根を残すものや柱の痕跡をうかがい知ることのできるものなどがあるが、明らかに掘建柱建物跡の柱穴と判断されるものも含まれていた。I・II 残存例をみると、直径 20 cm ~ 15 cm を測る小規模な柱であって、建物そのものも小規模であったと判断される。しかしながら、これらがはたして何棟分の建物であって、どのような柱穴が組み合って、如何なる規模の建物になるかは判明しなかった。全体として、この柱穴やピットを概観すると、発掘区の C 6 区から C 7 区に集中しており、さらに B 3 区においても、ある程度まとまりが認められた。傾向として、これらの遺構は発掘区北側に集中し、南側に極めて少ないことを指摘できる。

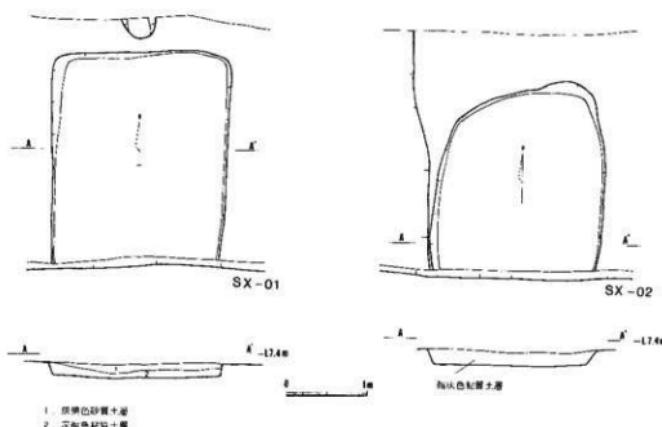
(4) 竪穴 遺構 (第27図)

S X 01 発掘区の西南で発見され、南側については未発掘区に延びているため、完掘できなかった。調査区内では東西 2.6 m、南北 2.5 m、深さ 0.2 m を測り、わずかに隅丸を呈する長方形のプランである。底面は炭化物を含むが、焼土等は検出されなかった。また、内部に柱穴などと考えられるピットは認められなかった。

S X 02 C 7 区の西南で発見され、S X 01 より 5.5 mほど西側に位置する。南側については未発掘区に延びているため、完掘できなかった。調査区内では東西 2.1 m、南北 2.3 m、深さ 0.15 m を測り、隅丸方形よりもわずかに崩れた不定形を呈するプランである。底面に近い位置で山茶碗が出土している。



第26図 柱穴断面図



第27図 積穴構造実測図

第2節 出土遺物

本節では、中世を中心とする出土遺物を述べることとするが、このうち、遺構の年代の指標となる上器、陶磁器を重点的に記述したい。

S D 02 出土土器(69) 土鍋、かわらけ小皿、施釉陶器片が出土している。このうち、土鍋は、鉢通しの孔をもつ耳をつけた「内耳鍋」が多い。また「く」の字状を呈する口縁で半球形を呈する特徴的な器形から、たとえ、内耳部分が欠損しているも、内耳鍋と判断できるところから、これについても本記述の中でも内耳鍋に含めた。

No.69の鍋は短く肥厚させた口縁で、胸部以下は不明である。施釉陶器では、大窯Ⅱ期の天目茶碗小皿、擂鉢、常滑の口縁部を巾広く造るタイプの大斬、ヘラ描細弁文青磁片が出土している。

S D 03 出土土器 上鍋・古瀬戸灰釉大平鉢、鐵釉の天目茶碗が出土している。古瀬戸後期～大窯Ⅱ・Ⅲ期の施釉陶器としてとらえることができよう。

S D 04 出土土器 (66・67) 内耳鍋、古瀬戸灰釉四耳壺、初山焼鉄釉小皿、古瀬戸灰釉香炉片が出土している。内耳鍋は、「く」の字状の外反する口縁で、口端部を内側に回り返すタイプ。口端部をわずかに凹ませるタイプ、口端部を面取りして平坦につくるタイプがある。竹出する施釉陶器は古瀬戸後期に帰属する例が多い。

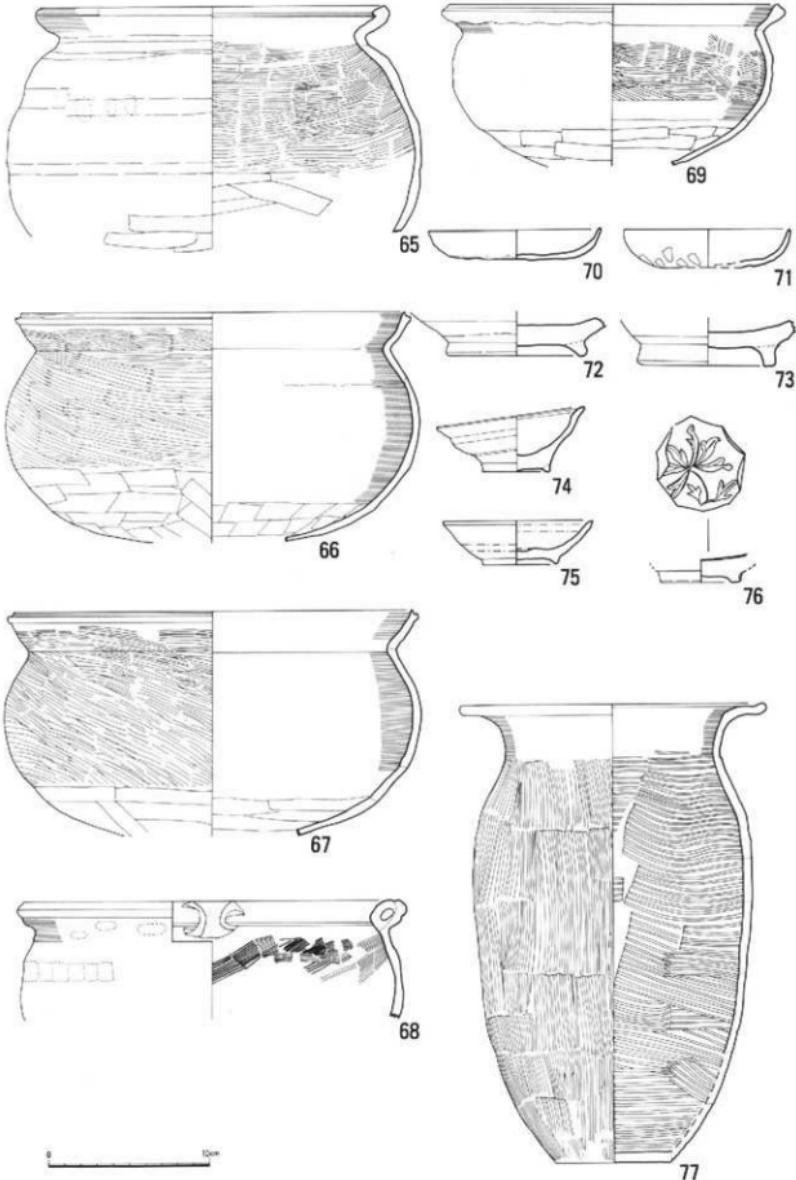
S D 05 出土土器(69) 内耳鍋、古瀬戸灰釉四耳壺、初山焼鉄釉小皿、古瀬戸灰釉香炉片が出土している。内耳鍋は、低く短い口縁部で胴部以下、欠損している。施釉陶器では古瀬戸後期～大窯Ⅱ・Ⅲ期に帰属するが、相対的に古瀬戸後期が多い。

S D 18 出土土器 (72・73・75) 無釉の山茶碗、小壺が出土している。小壺は、低く、わずかに断面瓜形を呈する。山茶碗は、高台部のみ残存しているので、詳細な時期比定はできないが、先の小壺と共に存は矛盾しないと判断している。

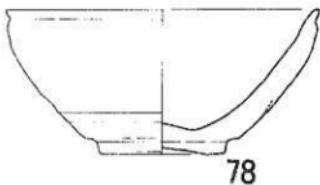
包含層出土土器類　遺構には伴なわないが、大破片であって、遺構の存続年代を知るため有効な資料を提示しておく。No.78、79の天日茶碗は、口端部下位にわずかに屈曲部をもち、露胎部に鬼板化粧がけをする、また高台々を内ぞりにつくるなど、瀬戸・美濃系編年の大窯Ⅱ期に比定できる。No.80の小皿は、葵筒底で、身込みに印花文をもつ。釉は、明るい灰釉が掛けられている。大窯Ⅱ・Ⅲ期に帰属させておきたい。No.76の青磁塊は、身込みに片切彫りによる画花文を描く。高台および高台内は露胎である。このほか、片押し蓮弁文青磁塊片。白磁片（器種不明）が出土している。

30点を数える土鍤が発見された。すべて、粗製の粘土筒状を呈するもので、外面には、掘った状態の指頭圧痕を顕著に残すものもみられる。計測値は別表に掲げた。

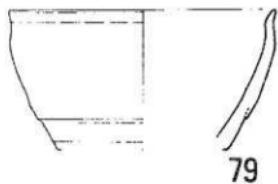
このほか、刀子伏利器、脇差の柄の銅金具、機織具の大杼や簀などの木製品、漆器椀片が出土している。



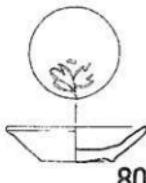
第28図 中世土器陶器実測図(1)



78



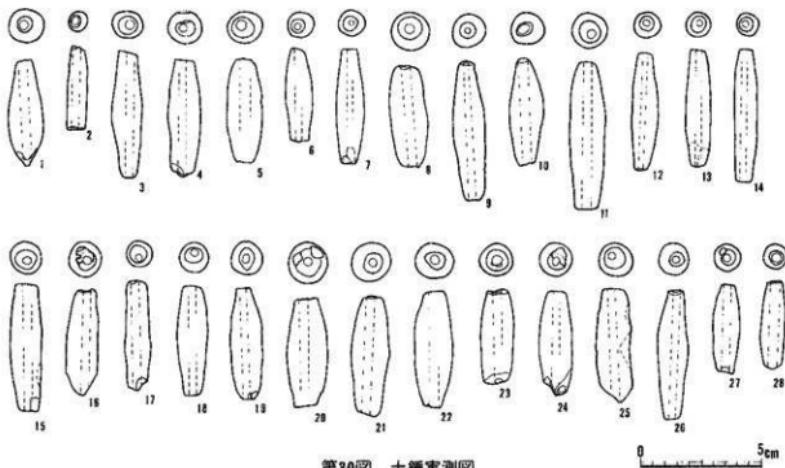
79



80



第29図 中世土器陶器実測図(2)



第30図 土錘実測図

0 5cm

表1 土錘計測値一覧

插図番号	反さ(cm)	最大深さ(cm)	内径(cm)	重さ(g)	色	調	始	上
1	(4.4)	4.9	0.35	(6.5)	黄褐色	精	良	
2	(3.4)	0.8	0.3	(2)	赤褐色	良	好	
3	(5.2)	1.25	0.35	6	"	精	良	
4	(4.8)	1.4	0.3	(7)	淡褐色	"		
5	5.2	1.5	0.4	7	赤褐色	良	好	
6	(3.9)	1.1	0.25	4.5	濃灰色	"		
7	4.7	1.15	0.2	(5)	明褐色	"		
8	(4.3)	1.6	0.4	(8.5)	"色	"		
9	5.8	1.5	0.3	8.5	赤褐色	"		
10	4.4	1.45	0.45	6.5	暗黃褐色	"		
11	6.1	1.5	0.35	12.5	赤褐色	精	良	
12	4.8	1.1	0.25	5	"	良	好	
13	4.85	1.5	0.25	4.5	"	"		
14	5.4	0.9	0.25	(4)	"	"		
15	5.2	1.35	0.35	(7.5)	"	"		
16	(4.3)	(1.4)	0.35	(6.5)	黄褐色	"		
17	(4.5)	1.05	0.35	(4)	赤褐色	"		
18	4.5	1.25	0.3	5.5	"	"		
19	4.5	1.4	0.35	(7.5)	淡褐色	中	不良	
20	4.5	1.7	0.3	(11.5)	"	良	好	
21	4.9	1.6	0.35	(10)	赤褐色	"		
22	4.8	1.6	0.4	(9.5)	黄褐色	"		
23	3.9	1.4	0.4	6	赤褐色	良	好	
24	4.3	1.4	0.3	6.5	"	"		
25	(4.7)	(1.55)	0.35	9	"	"		
26	5.4	1.3	0.3	7.5	"	精	良	
27	3.65	1.1	0.3	3.5	黄褐色	良	好	
28	3.7	1.1	0.4	(3)	暗褐色	中	不良	

第 V 章 ま と め

本遺跡は浜名湖北岸都田川流域に位置する弥生時代遺跡の代表例として広く知られるところであるが、昭和56年の浜松市遺跡調査会の発掘調査によって、多量の弥生土器が出土して再び注目された。

今回の発掘調査は、さきに実施された調査地点に北接する区域を対象としたものであり、弥生時代～古墳時代初頭、中世（平安末～戦国時代）の遺構・遺物が発見され、先の調査結果に加わる豊かな成果を得たといえる。

また、昭和57～59年の3年にわたって、およそ 1600 m²ほどの範囲を調査することが予定されており、都田川流域を代表する耕野遺跡の実体の一部を明らかにできるものと考えられ、この点においても意義深いといえよう。以下、2・3の問題点について、その概略を述べ、一応のまとめとするとともに来年度以降の調査報告の課題としたい。

第 1 節 弥生時代について

弥生時代から古墳時代初頭の遺構については、すでに述べたように、堅穴住居跡1・掘立柱建物跡1・溝状遺構30・土坑30余・ピット60余があげられる。第1に遺構の性格について考えてみたい。掘立柱建物跡については出土遺物が少なく、遺構の検討材料に乏しいが規模から倉庫跡と考えられる。その年代については単に弥生後期としておく。堅穴住居跡については床面から欠山式土器と菊川式土器（台付鉢）が出土しており、弥生後期後半=欠山期（耕野期）の住居跡と判断しておきたい。

溝状遺構については、その規模の大小によって大別できるが、さらに覆土の違いや覆土中の土器の状態によっても小区分ができる。例えば S D 15～20 は小規模な溝で、覆土中に有機物や焼土を包まず、土器片も少ない。S D 23・29については、有機物や焼土を含んでおり、大形土器片も入っていた。このような違いをみせる溝状遺構の性格について知る手がかりはきわめて少ないといわざるをえないが、有機物や焼土が含まれ、大形土器片の入っている溝状遺構については何らかの日常生活に関係する遺構と判断しておきたい。また S D 24については、ほぼ完形に近い土器がブロックで十数個体出土しているが、覆土についてはほかの遺構と異なる点は認められない。この遺構の年代は出土した土器から古墳時代初頭と考えられるが、今回、発見された遺構の中では当該期のものはきわめて少數であり、全体としてどのように考えるかは、今後の検討課題としたい。

発見された土坑は、円形もしくは椭円形を呈するものであって、大形破片が含まれるものもあるが、ほとんど完形に復元できるものは少ない。覆土は、炭化物・灰・焼土の含まれるものと焼土・灰を含まず、炭化物をわずかに含まれるもの、これらが含まれないものにわけることができる。このうち、炭化物・灰・焼土の含まれるものについては、何らかの日常生活を廃棄した遺構ではないかと考えられる。今回の調査区域については、こうした土坑が多いのも特徴のことである。

第2に遺構の時期についてである。本報告では住居跡・溝状遺構などの時期を検討したが、その時期は寄道（伊場）、欠山期を中心とするもので、後出する欠山期の遺構が相対的に多い点が指摘できる。このようにみると、本遺跡の寄道（伊場）期の居住城がつぎの時期にはば重なるものの欠山期に入って急速に拡大したとみることができよう。両者の間にスムーズな移行がみられるといえるのではないだろうか。

第2節 中世について

中世の遺構は、平安末期～鎌倉時代、戦国時代の2時期にわたることができた。しかしながら、掘立柱建物跡の柱穴と考えられるピット群については、建物の規模とともに、先の2時期分類のうちどの時期に該当するかも明確には判別できなかった。これ以外の遺構については、SD 18と呼称した溝状遺構、堅穴遺構が平安末期～鎌倉時代に比定され、SD 02～SD 10の溝状遺構、井戸状遺構が、戦国時代に比定された。

平安末期～鎌倉時代の溝状遺構であるSD 18については、発掘区の西半を北東方向から南西方向に延びている。わずかに山茶塗・小皿を伴出するほか遺物は認められなかった。また、出土遺物は、高台をもつ小皿であって、12世紀中頃～後半と考えられる。この溝状遺構が埋った段階で形成された堅穴遺構は、出土した山茶塗から13世紀中頃と推定された。SD 18の存続年代はこの間の年代軸におさまると考えられる。このほか、明確な遺構は発見できなかったが、青磁片などの優品も含まれている。

戦国時代の遺構については、柱穴群、井戸状遺構2、溝状遺構9を発見した。柱穴群から建物跡の規模等明確にはしえなかつたが、柱穴のスケールからすれば、むしろ、小規模建物といわざるをえないだろう。井戸状遺構については井戸を保護する設備を設けないいわゆる素掘り井戸であった。検出面では井桁等の上部構造を推定できる材料は認められなかつたが、考慮すべきかもしれない。また、この井戸状遺構の目的が生活用水か灌漑用水であるのかも問題であるが、今回の調査では、検討材料はもらえなかつた。溝状遺構については、柱、機織具の一部などが覆土中に入っていたが、日常什器(陶器・土器)は少なく、全体として生活用具の割合は少ないという印象をえた。今回の調査によって発見された戦国時代の遺構面は、以上のような状況からすれば、明らかに当該期の農村的一面であるといえるが、居住域の中心部とはいえないのではないかと思われた。

また、この面や遺構からの出土遺物は、古瀬戸～大窯Ⅱ期に集中しており、15世紀末～16世紀中頃に中心を置く遺構群といえよう。広く静岡県下の概観すると、当該期の農村集落の調査例は極めて少なく、今回の調査例はきわめて意義深いといえよう。

第2表 土器觀察表(1)

番種	図版 版	計測値(cm) 口径・底径	土器の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺	1	口径 16.5 器高 胴径 底径	○口縁部はおりかえして外反する。 ○ヘラによる刺突を施す。	○口縁部をわずかにハケ調整。 ○口縁部外側下位に一部短いハケ口調整。	胎土…細かい砂粒と長くめ肥厚する。 焼成…普通 色調…黄褐色	SD- 14
壺	2	口径 17.2 器高 胴径 底径	○受口状を呈し、端部下位に横線紋を施す。 ○口縁部と胴部の境界に低い凸唇をもつ。	○頸部外側下位に一部短いハケ口調整。 ○肩部外側に15本の横溝紋が見られる。 ○口縁部内面が紙へラ磨キ調整。	胎土…多突起及び砂粒が混じっている。 焼成…やや堅 色調…やや黄色を帯びた白色	SD- 14 口縁部残。
壺	3	口径 19.5 器高 胴径	○口縁部は大きく開き、口端部は極く内縮する。 ○肩部外側は横線紋を施す。	○口縁部内外面はヘラ磨キ調整。 ○肩部外側は横ナデ調整。 ○口縁部は強い横ナデ調整。	胎土…長石、石鈍の混合物を含む。 良好 焼成…堅 色調…淡赤褐色	SD- 14 口縁部 1/3 残存
高杯	4	口径 12.0	○大きく外反する杯端をもつ。 ○中位に手描きによる飾捲紋状紋 ○波状紋の1単位は5波	○口部下位へラ磨キ調整。 ○内面のヘラ磨キは杯端下位から上位に磨く。	胎土…長石が少し混入する。 焼成…普通 色調…淡赤褐色	SD- 14 环部のみ残存
鉢	5	口径 20 器高 胴径 底径	○口縁部を巾広くつくり、刺突による羽状紋を3段極く。 ○胴部は半球形を呈する。 ○底部は不明。	○口縁部内側横ナデ調整。 ○胴部内面下位はヘラ磨キ調整。	胎土…砂粒を多少含む。 焼成…普通 色調…淡赤褐色 一部黒斑有り	SD- 14
小型壺	6	口径 10.6 器高 7.8 胴径 9.6 底径 4.7	○縦やかに外反する口縁部をもち、胴部下位に最大径をもつ。 ○底部は平底。	○外面の底部から胴部にむかって一部ハケ口調整。 ○器壁が荒れおり、調整痕観察不能。	胎土…長石等の混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	SD- 11 底部を残し約1/5の口縁部と胴部
壺	7	口径 15.8 器高 胴径 底径	○無く大きく外反する口縁部をもち、胴部は球形を呈する。 ○口縁部は肥厚させる。 ○文様帶は横線紋→波状紋→横線紋の順。	○口縁部内外面横ナデ調整。	胎土…砂粒の混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	SD- 15 口縁部 1/2残
壺	8	口径 8. 器高 13. 胴径 底径	○口縁部は平坦につくる。 ○底は凹み底。	○口縁部の内側は横ナデ調整。 ○胴部へラ磨キ調整。 ○全体に水煮した粘土を化粧かけ。	胎土…良好、細かい石粒を含む。 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	SD- 23
壺	9	口径 10.8	○口縁部と胴部の境界に凸唇が付く。	○口縁部外側横ナデ調整。 ○内面はハケ口調整。 ○胴部は7本単位と5本単位の横横縫取目。 ○器による刺突。	胎土…良好・密 焼成…堅 色調…淡黄白色	SD- 23 胴部以下欠
小型壺	10	口径 5.3 器高 6.7 胴径 6.9 底径 3.7	○口縁部の筋曲が不明瞭で、ほぼ直立気味に立ち上る。 ○底部は平底。	○口縁部の外側横ナデ調整。 ○胴部中位外側には短いカキ口調整。 ○胴部外側約1/3の下位の部分が荒い間隔のハケ調整。	胎土…砂粒・長石等の混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	SD- 23 完形品

第3表 土器観察表(2)

器種	口径 底径 高さ 厚さ	計測値(cm) (は推定値)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
小型壺	11	口径 13.8 (最大径) 底径 5.6	◦器壁が厚く胴部下部が弧る。	◦胴部の上位から中位にかけて縦ヘラ削り調査。 ◦下位に横ヘラ調査。 ◦頸部内面一部にケメリ調査。	胎土…やや良好。長石や小粒の混じり物がある。 焼成…堅色調…淡赤褐色	SD-23 口縁部欠 胴部から頸部にかけ約1/2欠
小型壺	12	口径 9.2 (最大径) 底径 5.5	◦口縁部は直立気味でわずかに外反する。 ◦胴部は球形を呈する。 ◦胴部内面で最大径をもつ。	◦全体に化粧土をかける。 ◦底部中央が凸、その周辺が凹む。	胎土…密 焼成…やや堅 色調…淡黄褐色	SD-17
甕	13	口径 器高 胴径 底径 厚さ	◦口縁部は外反し、端部を平坦につくる。 ◦球形を呈する胴部をもち、底部は平底。 ◦胴部上位に円錐紋を描く。	◦口縁外面は横ナデ調整。 ◦腹部外縁及び底部にも長い単位のハケ目調査。 ◦口縁内面に短い単位の横ナデ調査。 ◦胴部下位から底部にかけては、長い単位の中心に向かってのハケ目調査。	胎土…石粒・長石等の混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…淡黄褐色	SD-25
甕	14	口径 器高 胴径 底径 厚さ	◦口縁部が「くの字」に屈曲し、下側部は丸みを帯びる傾向となる。 ◦底盤は平底。 ◦口縁部は外反し、口縫部は平坦な面をつく。 ◦頸部外面向て円形剥離突起を描く。	◦口縁部面に短い単位で荒い凹陥のハケ目調査。 ◦胴部上位及び下位一部に短い荒い凹陥のハケ目調査。 ◦底部、胴部中位の内面に指剥離痕が残る。	胎土…石粒・長石等の混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	SD-25 口縁部1/2 胴部3/4 欠
広口壺	15	口径 器高 胴径 底径 厚さ	◦口を大きくする口縁部で端部はヘラ削りによる斜行裁を施す。 ◦肩部に荒い間隔の8本の横線紋を施す。	◦口縫部は横ナデ調整。 ◦その間に口縁中位に荒い凹陥で細い縦のハケ目調査。 ◦口縁内面横ナデ調査。	胎土…石粒・長石等の混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…淡赤色	SD-29 胴部以下欠
台付瓶	16	口径 器高 胴径 底径 厚さ	◦口縁部は大きく外反する。 ◦球形の胴部をもつがそれ以下は不明。 ◦口縫部にキザミをもつ。	◦口縁外面に横ナデ調査。 ◦腹部外縁にナナメのハケ目調査。 ◦口縫部下位はこのハケ目によって横ナデが一部施されている所もある。 ◦胴部外縁は単位は短く間隔も荒い。横ハケ目調査。 ◦腹部外縁中位にナナメハケ目調査。 ◦口縫部内面に横ナデ調査。	胎土…長石・砂粒の混合材を含む。 焼成…軟（一部発光で半焼）器地は不良。 色調…淡黄白色	SD-27 口縁部・肩筋
甕	17	口径 器高 胴径 底径 厚さ	◦口縫部に内する平坦面をつくる。 ◦下縫部に最大径をもつ。	◦一部にハケ目調査。 ◦摩耗が激しく観察不可能。	胎土…砂粒の混合材を含む。 不良 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	SD-30
小型壺	18	口径 器高 胴径 底径 厚さ	◦球形を呈する胴部をもち、底部は平底だが、中心はわずかに凹む。	◦内外面とも厚壁。	胎土…長石等の混合材を含む。 焼成…堅 色調…暗淡赤褐色	SD-30 口縫部欠
甕	19	口径 器高 胴径 底径 厚さ	◦短く緩やかに外反する口縁部をもつ。 ◦口縫部外縁はヘラ削りによる削り突き。	◦胴部外縁中位まで荒い間隔で短い単位のナナメのハケ目調査。 ◦口縫部内面から胴部に荒い凹陥で長い単位の横ナデ調査。	胎土…石粒・長石等の混合材を含む。 焼成…堅 色調…淡褐色	SD-30 口縫部2/3 胴部1/3 欠
小型壺	20	口径 器高 (5.6) 胴径 底径 厚さ	◦緩やかに外反する口縁部をもち底部は平底。	◦口縫部外縁から胴部にかけて荒い間隔のハケ目調査。	胎土…石・小石粒等の混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色体部約1/2や1/3 がある淡黄褐色	SD-35 口縫部1/2欠

第4表 土器觀察表(3)

器種	國版 名	計測値(cm) ()は推定値	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	備 考
高 坯	21	口径 18.0 器高 28.8 脚径 27.6 底径 6.0	○端部は内側に押して平坦につく。 ○脚部から端部にかけて緩かに内傾する。	○外面は全面にヘラ磨き調整。 ○端部は横ナデ調整。 ○内面全面にヘラ磨き調整。	胎土…良好 焼成…良好・堅 色調…淡黄褐色	SD-24 約1/3残存
壺	22	口徑 器高 脚径 底径	○口端部にかけて外反する単純口 縁をもつ。 ○環形を呈する脚部をもち、底部 は平坦だが、中心はわずかに凹 む。	○外面の口縁及び脚部、底部にハ ケ目調整。 ○口縁と脚部のハケ目幅が多少違 う。 ○口縫の方が荒い。 ○内面全体にハケ目調整。その上 からナデで消されている。	胎土…長石・石粉等 の混合材を含む。 焼成…やや歎 色調…明赤褐色	SD-24 脚部1/3欠
壺	23	口径 15.0 器高 28.8 脚径 27.6 (最大径) 底径 6.0	○口縁部は外側に大きく開く。 ○環形を呈する脚部で最大径は中 位にくる。	○脚部板ナデ ○接合部下位やや荒いハケ目調整。	胎土…良好・密 燒成…やや堅 色調…淡黄褐色 ところどころ に薄い斑あり	SD-24
壺	24	口径 14.8	○口縫部は接合部で直立気味で斜 曲し、さらに大きく外反する。	○表面の損耗が著しく観察不能。	胎土…良好 焼成…良好・やや堅 色調…灰黄褐色	SD-24
壺	25	口径 19.4	○口縫部は直立気味の肥厚させた複 合口縁。	○口縁の内外に横ナデ調整。 ○口縁外周に荒い短いハケ目 調整。	胎土…細かい砂粒の 混合物を含む。 良好・密 燒成…堅 色調…淡赤褐色	SD-24 脚部欠
小形壺	26	口径 8.6 器高 7.1 脚径 8.5 底径 4.3	○小形の壺では縁部が広く、立ち あがりながらわずかに外傾する。 ○底は凹み底。	○脚部ハケ目調整。 ○口縫部は横ナデ調整。 ○脚部外周化粧かけ。	胎土…やや良好 長石や細かい 石粒が含まれ ている。 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	SD-24
小形壺	27	口径 11.2 器高 6.1 脚径 3.4	○口縫部が外側に大きく外反。 ○底部は凹み底。	○口縫部の内面にハケ目調整。 ○底部はヘラによる押圧。	胎土…やや良好 長石・砂粒な ど混じり物が 含まれている。 密 燒成…やや堅 色調…黃褐色。脚部 に黒斑あり。	SD-24 口縫約5/1欠
小形壺	28	口径 11.05 器高 5.6 脚径 3.7	○中央が凹む平底で、口縫部へ向 かって緩やかに内傾しながらつ づく。	○底部内面ハケ目調整。	胎土…石粒の混合物 を含む。 焼成…やや堅 色調…暗赤褐色	SD-24
高 坯	29	口径 21.4 器高 16.15 脚径 13.1	○口径が最大径を持つ。 ○底部下位で屈曲し、ほぼ直線に 立ち上がり、口縫部はつまみ出 してりぎみにつく。 ○脚部は外反する。 ○环形の中央はわずかに凹む。 ○脚部は中位に3孔円窓。	○环形外周にヘラ磨き調整。 ○脚部外周にヘラ磨き調整。	胎土…長石・砂粒の 混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…赤褐色	SD-24 环部1/3欠
高 坯	30	口径 25.4 器高 13.4 底径 13.8	○环形は口径が広く、脚部に3孔 円窓。	○环形の外周は摩耗が激しく観 察不可能。 ○脚部外周はヘラ磨き調整。 ○环形と脚部のつなぎ目をしぶ る。 ○脚部外周化粧かけ？	胎土…良好 細かい石粒が 含まれている。 焼成…やや歎 色調…黄褐色	SD-24

第5表 土器觀察表(4)

番号	図版 版 面	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
S.字 台付壺	31	口径 14.8	○口縁部は明顯にS字に屈曲し、その波は鋭どい。	○口縁部内外面横ナデ調整。 ○胴部は横ハケ調整。 ○上位輪ナデハケ調整。	胎土…やや良好 細かい長石粒 や金雲母が混じっている。 焼成…やや堅 色調…黄色系を帯びた乳白色 スヌ付着	SD-24
台付壺	32	口径 17.9 器高 23.4 胴径 8.9 (最大径) 底径 19.9	○くの字の大きく外反する口縁部で胴部上位に最大径をもつ。 ○台端部は平坦につくる。	○頸部外面横ナデ調整。 ○胴部のハケ日が底部の1/3に及んでいる。 ○頸部内面は横ナデ調整。 ○頸部と胴部の接合部分が一連制限。 ○輪づみに上る指頭圧痕があり上から横ナデ及びハケ調整がされている。 ○台部はハケ調整。	胎土…やや良好 焼成…やや堅 色調…赤褐色	SD-24 口縁部1/4欠
台付壺	33	口径 20.0 器高 33.3 胴径 22.9 (最大径)	○ソケット状につける台部が尋ねたと思われる接合痕有り。 ○口縁部は鋭かに外反する。 ○口唇部は丸くおさまる。	○口縁部横ナデ調整。 ○胴部のハケ調整から頸部の横ナデ調整。 ○輪づみのあとナデ調整。	胎土…良石・金雲母 は少ないが他の石粉が多い。 焼成…やや軟 色調…淡赤褐色	SD-24 台部、欠 スヌ付着
壺	34	口径 14.2 器高 7.2	○口縁部はくの字状に緩やかに外反する。	○口縁部外面横ナデ調整。 ○胴部内外面ともハケ日調整。	胎土…やや良好 少々亂じり物 あり(砂粒) 焼成…やや堅 色調…内面淡赤褐色 外面暗赤褐色	SD-24 胴部下欠
小形壺	35	口径 11.3 器高 11.2 (最大径) 胴径 13.0 (最大径)	○短く“く”の字を呈する口縁部をもつ。 ○胴部は球形を呈する。	○口縁部横ナデ調整。 ○胴部全面に荒いハケ日調整。 ○棒状器具によるカキ取り。 ○口縁部内面ハケ日調整。	胎土…石粒・砂粒が 含まれている。 焼成…やや軟 色調…淡黄褐色	SD-24 胴部下欠
(台付) 壺	36	口径 18.2 器高 胴径 底径	○口縁部は「くの字」状に屈曲し外反する。 ○土質・色調の違う粘土を使っている。 ○口縁部外側の接合痕のつなぎが線状に色剥の違いとなる。	○外面頸部は一部から胴部全体に荒い前輪のハケ日調整。 ○口縁部内面に荒いハケ日調整。	胎土…石粒・長石の 混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…淡赤黃褐色	SD-24 口縁1/8及び 胴部残
壺	37	口径 (12.5) 胴径 17.6 (最大径)	○口縁部の上を平坦に造り、きざみをつける。 ○口縁部が鋭く、極かに外反する。	○胴部外面ハケ日調整。 ○口縁部は楕円方向、胴部中位からは横ハケ日。 ○内面ハケ日調整。	胎土…細かい長石や 石粒などが多く 量に含む。 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	SD-24
台付 壺	38	口径 14.2 器高 胴径 底径	○口縁部が緩やかに外反し、球形の胴部をもつ。	○胴部外面に荒いハケ日調整。	胎土…砂粒の混合材 を含む。 不良 焼成…やや堅 色調…明黄白色	SD-24 胴部1/3、底 部欠
壺	39	口径 15.8 器高 22.5 胴径 22.8 (最大径) 底径 4.9	○口縁部は短く外反する。 ○凹みのある平底をつくる。	○胴部内外面ハケ日調整。	胎土…混合物が多い。 やや良好 焼成…やや軟 色調…淡赤褐色	SD-24
壺	40	口径 (13.4) 器高 (18.5) 胴径 (18.2) 底径 (5.4)	○口縁部は外反し、胴部は緩く丸みをおびて平底の底座へつづく。 ○口縁部にへらによる刺突が見られる。	○口縁部及び胴部の全体にハケ日調整が見られる。 細い単位でハケ目間隔も密で一本一本が細い。 ○内面口縁部は荒い印き目で調整。	胎土…長石及び石粒 を含む。 焼成…やや堅 色調…明赤褐色	SD-24 口縁部所々欠 胴部一部、胴 部下位以下 2/1欠

第6表 土器觀察表(5)

器種	器版 系	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
瓶腹壺	41	口径 13.9 器高 20.4 胴径 21.4 (最大径)	○直く直立気味の口縁で球形の胴部を持つ。	○胴部内外面共、ハケ目調整。 ○胴部のハケ目は下→上。	胎土…1mm~2mmの細かい石粒が多い。 焼成…やや歓色調…赤褐色	SD-24 口縁1/4欠
甕	42	口径 14.3 器高 17.3 胴径 16.2 底径 4.8	○口縁部はくの字に緩かに外反する。 ○胴部中位に最大径をもつ。 ○底部を平底につくる。	○口縁部は内代面共横ナゲ調整。 ○胴部内外面共ハケ目調整。 ○底至外周へラ磨き調整。	胎土…良好 焼成…堅 色調…淡褐色	SD-24
甕 (無台)	43	口径 14.0 器高 (20.75) 胴径 (20.3) 底径 (4.4)	○口縁部は「くの字」状に屈曲し胴部込みをおび、平底の底部へづく。	○口縁外面は、荒い肩隔の横ナゲ調整。 ○胴部是体外面に、荒い肩隔の細い単位のハケ目調整。	胎土…砂粒の配合物を含む 焼成…堅 色調…淡黃褐色	SD-24 胴部中位から下位以下1/5欠
甕	44	口径 13.6 器高 (14.2) 底径	○低い口縁部がくの字に緩かに外反する。	○口縁部斜日ハケ調整。 ○胴部内外面斜日ハケ調整。	胎土…長石・砂粒を含む 焼成…堅 色調…黄褐色	SD-24 胴部下位欠
甕	45	口径 10.4 器高 (14.6) 底径	○折り返し口縁で、大きく外反する。 ○下胴部はいちぢく状に張る。 ○胴部上位に横描羽状紋と円形付突をつける。	○口縁部横筋のヘラ磨き調整。 ○口縁部ヘラ磨き調整。 ○胴部下位に横筋のヘラ磨き調整。	胎土…微小雲母少量 1~2mm大赤 石酸化土少量 微小粒石少量 焼成… 色調…暗赤茶褐色	SF-16 底部欠
甕	46	口径 30.6 器高 胴径 底径	○大きく外反する複合口縁で平底形の胴部をもつ。	○口縁外面横ナゲ調整。 ○胴部外面はヘラ磨き。 ○口縁内曲横ナゲ調整。 ○胴部内面はヘラ磨き。	胎土…微小雲母少量 小粒石少量 焼成… 色調…赤褐色	SF-16
広口壺	47	口径 18.8 器高 胴径 底径	○直口する口縁部をもつ。 ○胴部以下不明。	○外側口縁から胴部にかけてヘラ磨き調整。 ○口縁内面はヘラ磨き調整。	胎土…1~3mm大チ チャート少量 微小雲母少量 1~2mm大赤 石酸化土少量 焼成…にぶい赤褐色 色調…	SF-16
甕	48	口径 16.2 器高 胴径 底径	○口縁部は大きく「くの字」状に外反する。 ○球形の胴部をもつがそれ以下は不明。 ○口端部にキザミをもつ。 ○内面里茎有り。	○外面口縁から胴部にかけてハケ目調整。 ○口縁はタテのハケ目調整。 ○胴部はナナメのハケ目調整。 ○口縁内面は横ハケ目調整。	胎土…1~3mm大チ チャート少量 微小雲母少量 焼成… 色調…外面・暗赤褐色 内面・暗黃褐色	SF-16
甕	49	口径 19.8 器高 胴径 底径	○口縁部は緩やかに「くの字」状に外反する。 ○球形の胴部をもつがそれ以下は不明。 ○口端部にキザミをもつ。	○口縁外横ナゲ調整。 ○胴部外面はナナメのハケ目調整。 ○口縁内面は横のハケ目調整。	胎土…1~5mm大チ チャート少量 1~2mm大赤 石酸化土少量	SF-16 胴部以下欠
高 环	50	口径 24.4 器高 胴径 底径	○環部中位で屈曲して大きく外反する。 ○环部上位に横描波状紋を描く。	○环部下位内外面へラ磨き調整。	胎土…微小雲母少量 小粒の砂、赤 石酸化土が少 量 焼成…堅緻 色調…内面・赤褐色 外面・にぶい 赤褐色	SF-16 1/8残

第7表 土器観察表(6)

器種	図版 番号	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
高环	51	口径 24.0 器高 胴径 底径	○环部中位で屈曲して人字く外反し、円筒状を脚部ともつ。 ○脚部下位に三孔円窓。 ○脚部は横指標線紋 2組。	○环部は内外面へラ筋キ調整。	胎土…微小雲母少量 1~3mmチャート。良 焼成…堅緻 色調…赤褐色	SF-16
右付窓	52		○直立気味に立つ。 ○台部と脚部の境界に粘土帯をまく。	○脚部内面下位から中位にかけてハケ日調整。	胎土…1~3mm大赤 1~3mm大チ タート。長石 石英少量。 焼成…堅緻 色調…赤褐色	SF-16
高环	53	口径 器高 胴径 脚径 (10.3)	○接合部から直線的に開く。 ○中位に三孔円窓。 ○脚部は平坦にする。	○脚部外面中位から下位にかけてハケ日調整。 ○脚部内面ハケ日調整。上位から中位にかけてはナナメハケ日、下位はナナメハケ日と横ハケ日調整。	胎土…微小粒、赤石 酸化土、雲母 少量。1~3 mm大チタート 少量。 焼成…堅緻 色調…赤褐色	SF-16
高环	54	口径 器高 胴径 脚径 (13)	○接合部から直線的に開き、颈部で大きく屈曲する。 ○脚部内面に横指標線紋。 ○中位に三孔円窓。	○脚部外面にヘラ磨キ調整。 ○脚部上位と下位にハケ日調整。 ○脚部中位は横ナデ調整。	胎土…微小雲母少量。 焼成… 色調…に赤褐色	SF-16
壺	55	器高 17.9 胴径 19.2 (最大径)	○脚部下部が突出している。 ○頸部にヘラによる刺突。	○脚部のハケ日調整は下位→中位→上位。	胎土…長石や石英を含む。 密・良好 焼成…堅 表面の一部に 黒斑有り。 色調…淡黄褐色	SX-03 口縁部欠
壺	56	口径 13.7 器高 胴径 底径 23.4	○脚部に 6 本の横指標線紋を施し、その下に横指標状紋→大きさも開闊もほぼ同じの刺突による斜行紋→横指標状紋→脚窓による斜行紋が脚部中位まで描く。 ○脚部はやや腰く外反し、口が広い。 ○胴部よりも口縁部の中位の方が器壁が厚い。	○外面の口縁部中位から下位にかけて、荒い間隔のハケ日調整が見られ、その上から横ナデ調整。 ○脚部内面に強い横ナデが見られ、下位の方はわずかにハケ日調整。	胎土…長石・砂粒の 混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…淡黄褐色	SX-03 口縁部 2/1 脚部中位から 1/2 底部欠
壺	57	口径 12.6 器高 胴径 底径	○单纯な縫跡。 ○外面の肩部から胴上面にかけて、その間の横指標を施し、その間に横指標状紋を施す。 ○鉢底外周にかけて一部黒斑有り。	○口縁部内外横ナデ調整。 上位は細かく、下位は荒い。 ○脚部外面七瓣位にかけてハケ日調整。	胎土…長石及び砂粒 を含む。 良好 焼成…やや堅 色調…淡黄褐色	SX-03 口縁部 脚部 1/3 残
壺	58	口径 器高 胴径 底径	○口縁は広い複合口縁。	○口縁及び頸部全体に横ナデ調整。 ○複合口縁下位から頸部にかけては、ナナメのハケ日調整をし、その上から横ナデ調整。	胎土…砂粒・長石等の 混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	SX-03 口縁部残
壺	59	口径 器高 胴径 底径 (5.4)	○頸部から口縁部にかけて縫やかに外反する。 ○脚部は丸みをおび、脚部中位に較人径を持ち底部は平底。	○脚部外面全体にヘラ磨キ調整。 ○脚部内面上面から中位にかけてハケ日調整。 上位は縫が細かく、開闊が密であり、中位は開闊が荒い。 ○底部内面にも開闊が荒く、円を描く。	胎土…砂粒・長石等の 混合材を含む。 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	SX-03 口縁部 3/4 欠
壺	60	口径 器高 胴径 底径 5.8	○頸部から口縁部にかけて縫やかに外反する。 ○脚部は丸みをおび、脚部中位に最大径を持ち底部は凹底。	○脚部外全體にヘラ磨キ調整。 ○脚部下位にハケの後でヘラ磨キ調整。 ○口縁内面にヘラ磨キ調整。 ○脚部内面ハケ日調整。	胎土…微小の雲母少 量、赤土酸化 土少量(1~2 人)、1~3 mm 大チャート少量。 焼成… 色調…乳白赤褐色	SX-03 脚部 1/4 残

第8表 土器観察表(7)

器種	図版 番	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	
壺	61	口径 器高 胸径 底径	17.4 口縁 器高 胸径 底径	○単純口縁で大きく外反する。 ○下耐部がいちぢく状に張る。	○口縁部外曲上位から中位にかけて模ナデ調整。 ○口縁部中位から下位にかけてはヘラ磨き調整。	胎土…砂粒・長石の混合物を含む。 焼成…堅 色調…明赤褐色	排水溝内 副部以下欠
壺	62	口径 器高 胸径 底径	9.9 15.5 14.1	○単純口縁でわずかに端部が外反する。 ○下耐部がいちぢく状に張る。	○口縁外面模ナデ調整。 ○副部外面紙位のハケ目調整。 胸部・底部一部に模ヘケ目調整。 ○内向口縁から胸部にかけて模ヘケ目調整。 ○平底底部は木彫痕。	胎土…1~2mm大チ ヤード 赤石酸化土少量 焼成… 色調赤褐色	排水溝内
壺	63	口径 器高 胸径 底径	15.4	○複合口縁では端部を肥厚させた。 ○肩部クシによる剣突紋を施す。	○口縁外面模ナデ調整。 その上から口縁中位にタテ方向に荒い凹凸のハケ目調整。	胎土…砂粒及び長石の混合材を含む。良好 焼成…やや堅 色調…明赤褐色	排水溝内 口部1/2残
高耳	64			○接合部から瓶部に大きく聞く。 ○中位に二孔円窓。	○脚部外面ヘラ磨き調整。 ○脚部下位にハケ目調整。 ○脚部内面下位にハケ目調整。	胎土…1~3mm大チ ヤード・石英 少量 赤石酸化土少量 焼成… 色調…赤褐色	V肩 环部欠

第9表 土器観察表(8)

器種	図版 番	計測値(cm) ([†] は推定値)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土鍋	65	口径 器高 胸深 底径 21.4 25.7	○口縁部は丸みを持ち内側する。 口縁部は折り返して平な面を作る。 球形の胴部をもち、丸底と推定される。	○口縁部と頸部の接合部をナデで削し、指で口縁部と頸部をめぼし付ける。 ○胴部内面中央に指頭圧痕が見られる。 ○口縁外周下部へラケグリ調整。 ○胴部内面へヶ目調整。 上辺から内側にかけて密で細かく、下辺は少し間隔が広い。 ○胴部内面へラケグリ調整。	胎土…砂粒の混和材を含む。 焼成…やや堅色調…淡茶褐色	V層 口縁部1/3 胸深内壁1/5 底。
土鍋	66	口径 器高 胸深 底径 23.8	○口縁部は「くの字」状に屈曲し 口縁部中央で丸みをおびていて。 球形の胴部をもち、丸底。	○口縁部は横ナデ調整。 ○胴部内面は荒いヶ目調整。 底辺近くでは指付ケズリ。 胴部内側は指付ケズリ。 ○内側の口縁部及び胴部下位まで横ナデ調整。 ○底部内側は横ナデケズリ。	胎土…細小粒大宝母 少量 0.5~1mm人 チート、砂、 岩、瓦石少量 焼成… 色調…内・にぶい赤 白灰色 外・赤白灰色	底部欠
土鍋	67	口径 器高 胸深 底径 25.2 25.8	○口縁部は「くの字」状に屈曲し 口縁部中央で丸みをおびていて。 丸底で球形の胴部をもつ。	○胴部外周下位までハケ目調整。 底部にかけてはヘラケグリ調整。 ○口縁部内側は横ナデ調整。 ○底辺内面へラケグリ調整。	胎土…砂粒を含む。 焼成…やや堅 色調…淡灰白色	SD-04 スヌ付着
土鍋	68	口径 器高 胸深 底径 25.5 25.6	○内耳つく。 ○底へ短い口縁部が外反する。 球形を呈する胴部をもつ。	○外面の頸部と副部に指で接合部を消す。 ○口縁上部から肩部にかけて横ナデ調整。 ○副部内面に板ハケ目調整。	胎土…砂粒を少量含む。 焼成…やや堅 色調…淡黄褐色	SD-05 II類部1/2段
土鍋	69	口径 器高 胸深 底径 21.4 19	○最大径が口縁部にあり、胴部が 丸みをもって扁平な形となる。 ○口縁部は外側に粘土組を張り つけて肥厚させる。 ○底辺に近づいて、器底が落くなる。 ○胴部最大径部分下部と口縁部に ススが付着。(真下から火を受けている)	○口縁部内面横ナデ調整。 ○副部内面土手位にヶ目調整。又 その上から所々荒いヶ目調整。 ○体部内面下位は被ナデの後に左 から右方向へのヘラケグリ調整。 ○外面は凸凹が激しい。 (ヘラケグリの後のナデ調整) ○口縁外周に横ナデ調整。	胎土…砂粒の混合材 を含む。 焼成…やや堅 色調…明赤褐色	SD-02 口縁部1/8段 胴部1/2段。 全体に付着物 あり。
小皿	70	口径 器高 10.8 1.75	○器高は低く底部平坦につくる。 ○口縁部にスヌ付着。	○内面ナデ調整。 ○底部には木片によるカキ取り。	胎土…密、良紅 焼成…やや軟 手捏 色調…淡黄白色	N層
小皿	71	口径 器高 15.0 2.41	○平坦な丸底で、わずかに内萼し ながら口縁部へつづく。	○粘土を板状にして底部をつくり、 胴部より上縁部をつくる手捏。 ○内部にスヌが付着。 ○化粧土をかける。	胎土…良好 焼成…やや堅 色調…淡褐色	SD-24 胎土 約1/5欠
山茶碗	72	器高 (残存部) 3.0 底径 8.6	○やや高い高台で外側にふんばる。	○高台内中央に静止糸切り痕が成 る。 ○高台内外周に横ナデ調整。	胎土…やや良好 混人物あり 焼成…堅 色調…淡灰白色	SD-18 口縁部欠
山茶碗	73	器高 (残存部) 1.9 底径	○高台高が高く、端部を面取りす る。	○高台縁へ削り。 ○高台内中央静止糸切り痕残る。 ○高台内外周横ナデ調整。	胎土…やや良好 混人物少々あ り 焼成…堅 色調…淡灰白色	SD-18 口縁部欠
小皿	74	口径 器高 9.3 3.5 底径 4.2	○口縁は緩かに外傾して開いてい る。 ○高台は方形ではりつけ高台。	○体部の外表面横ナデ調整。 ○高台内は糸切り痕を中央のみ 残す。	胎土…良好・密 焼成…堅 色調…青灰色 内側に自然釉 がかかるとい る。	III層 端部約1/5欠

第10表 土器観察表(9)

器種	円版 底	計測値(cm) ()は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
小皿	75	口径 9.4 器高 2.7 底径 4.5	○端部をやや尖りぎみに取めている。 ○高台断面はわずかに爪形を呈する。	○割部内外面横ナデ調整。 ○高台内の周囲は横ナデ調整。	胎土…砂粒を含む。 焼成…堅 色調…暗灰色 内側の1/4に 淡黄色の自然 釉がかかるで いる。	
青磁碗	76	底径 6	○ケズリ高台で見込み部に片切り に草花を描く。 ○高台は断面台形を呈する。	○高台内露胎	胎土…密 焼成…堅緻 色調…釉・青緑色 露胎・青灰色	
長脚甌	77	口径 19.0 器高 28.3 底径 7.2	○頸部から縁部にかけてくの字 状に屈曲し。口唇部の先端は丸 くおさめられている。 ○胸部は直立気味でわずかに丸味 をもって底部につづく。	○頸部の外面共横ナデ調整。 ○胸部全体に外面は擬ハケ片調整。 内面は横ハケ片調整。	胎土…良好 金型母を含む。 焼成…やや堅 色調…淡黄褐色	
天目 茶碗	78	口径(13.) 器高(5.9) 底径(5.2)	○口端部下位に緩やかな屈曲部を もつ。 ○高台部は明瞭な段をもつ。 ○高台内張り内ぞり。	○体部に天目釉をかける。 ○露胎部、鬼板化粧かけ。 ○付高台。	胎土…良 焼成…堅緻 色調…釉・焙茶と黒 褐色 露胎・茶褐色 十色・淡黃白色	
大目 茶碗	79	口径(11.0)	○口縁部下位に緩やかな屈曲部を もつ。 ○端部はやや尖っている。	○体部に天目釉をかける。 ○露胎部、鬼板化粧がけて暗黒褐 を呈する。	胎土…良 焼成…やや堅 色調…釉・焙茶と黒 褐色 露胎・黒褐色 土色・灰白色	
小皿	80	口径 5.7 器高 1.4	○低く角ばった底部に大きく外反 する口端部をもつ。 ○見込みにヘラで花紋を描く。	○体部内外面灰釉。 ○茶だまりに濃い灰釉。 ○底部、高台縁つき露胎。	胎土…良 焼成…堅緻 色調…釉・男茶褐色 露胎・灰白色	

図 版



1. 遺跡遠景（航空写真）

2. 調査前遠景（東より）



1. 調査前遠景（南より）

2. 調査前近景（東より）



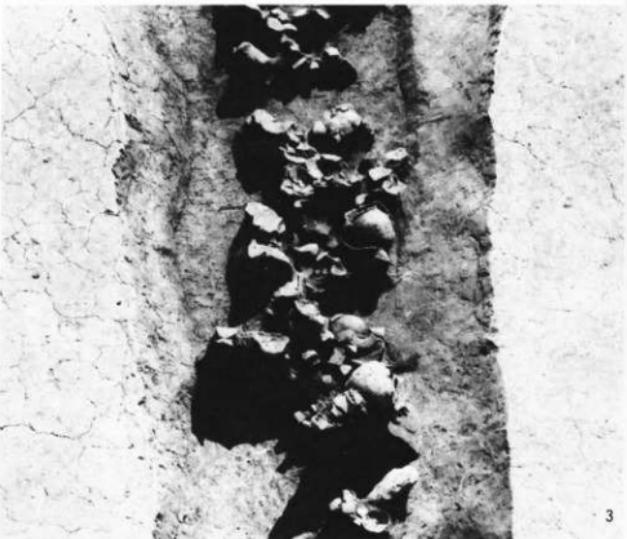
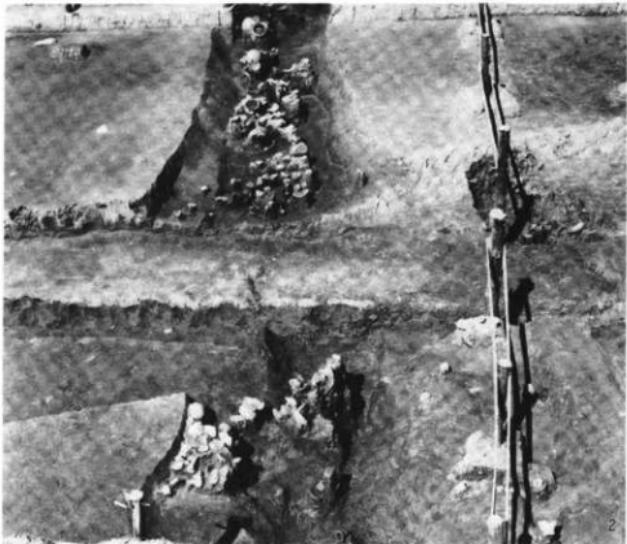
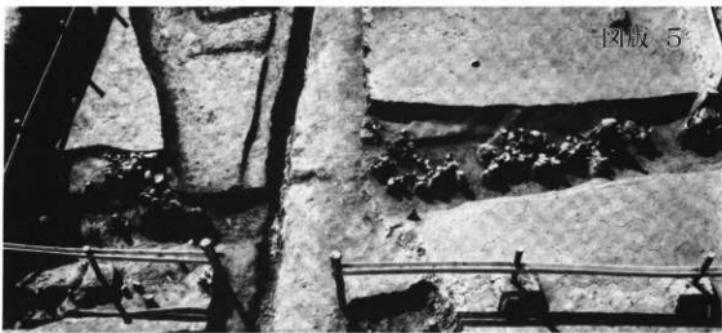
1. SB01 遺物出土状態（南より）

2. SH01 掘立柱建物跡（北より）



1. SD14 溝状道構全景（北より）
2. SD14 溝状道構遺物出土状態（北より）
3. SD23・29 溝状道構全景（南より）





1. SD24 溝状遺構全景（東より）

2. SD24 溝状遺構全景（南より）

3. SD24 溝状遺構出土状態（北より）



2



3

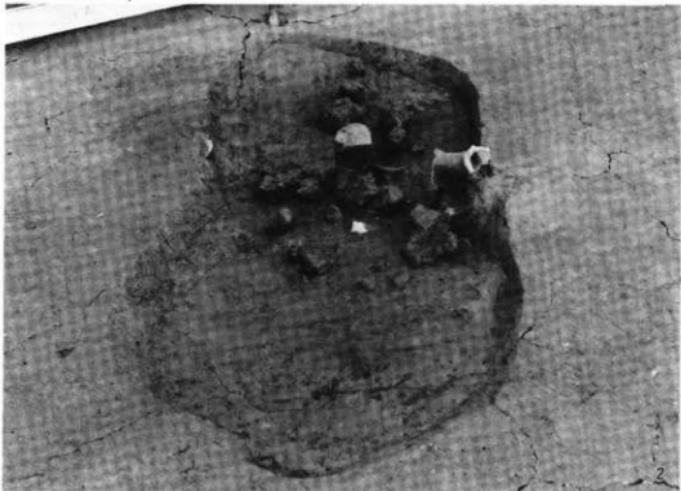
1. SD25 溝状遺構遺物出土状態
2. SD25・26 溝状遺構遺物出土状態
3. SD29 溝状遺構遺物出土状態



1. SD30 溝状遺構全景（北東より）

2. SD32 溝状遺構出土状態（北より）

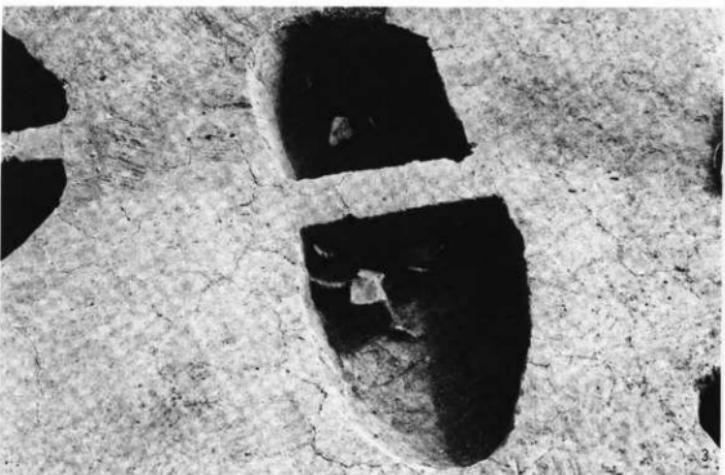
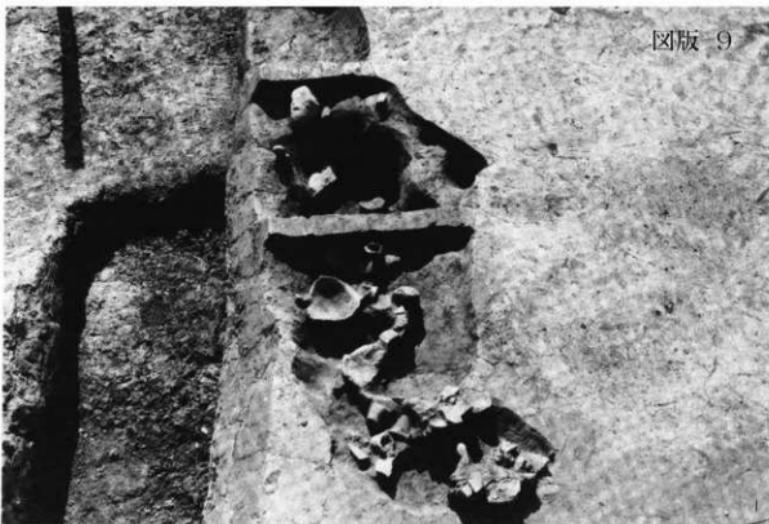
3. 銅鈸出土状態



1. SF01 土坑全景（南より）

2. SF07 土坑全景（南より）

3. SF08 土坑全景（西より）



1. SFII・12 土坑全景（北より）

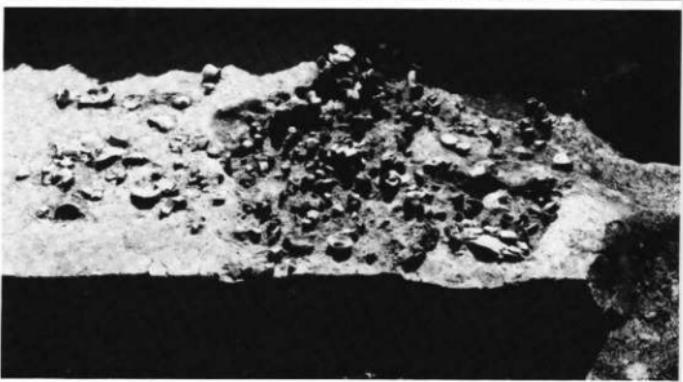
2. SF14 土坑全景（西より）

3. SF15 土坑全景（北より）



1. SF20 土坑全景（南より）

2. SF22 土坑全景（北より）



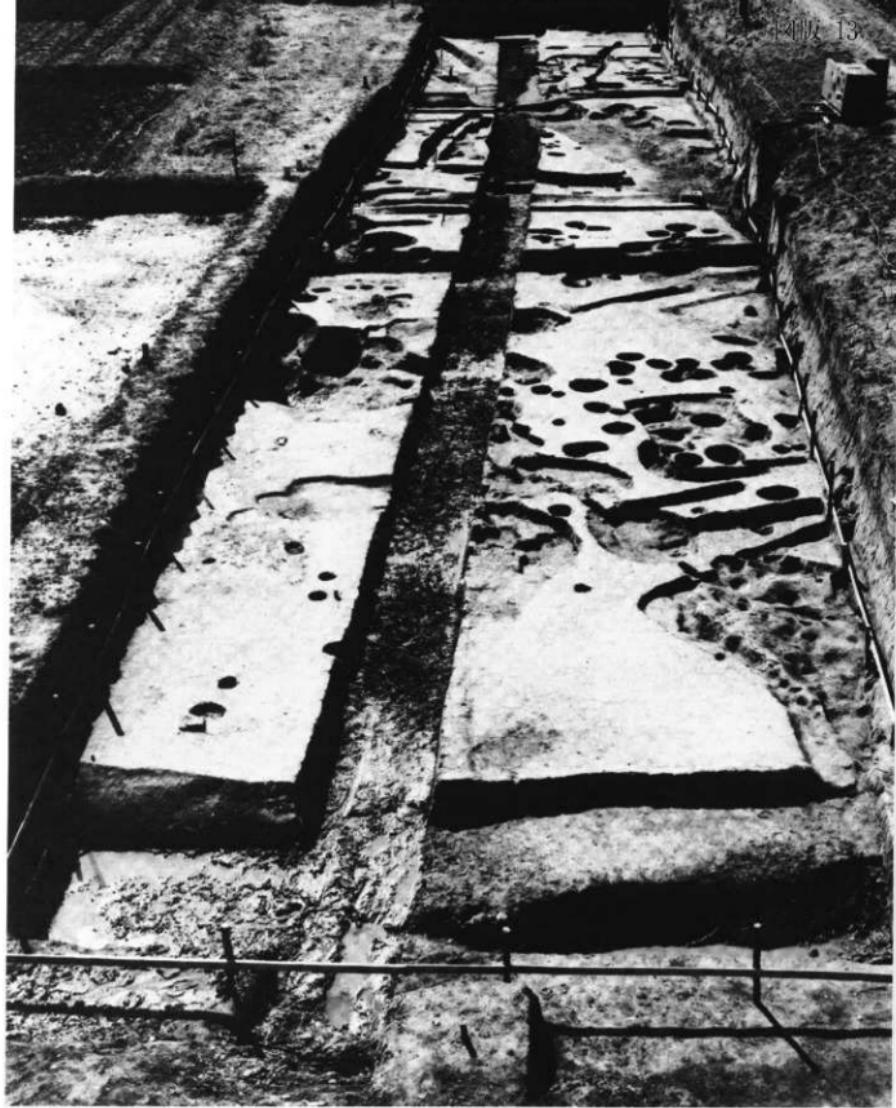
1. SX03 土器集中箇所（東より）

2. SX03 土器集中箇所（北より）

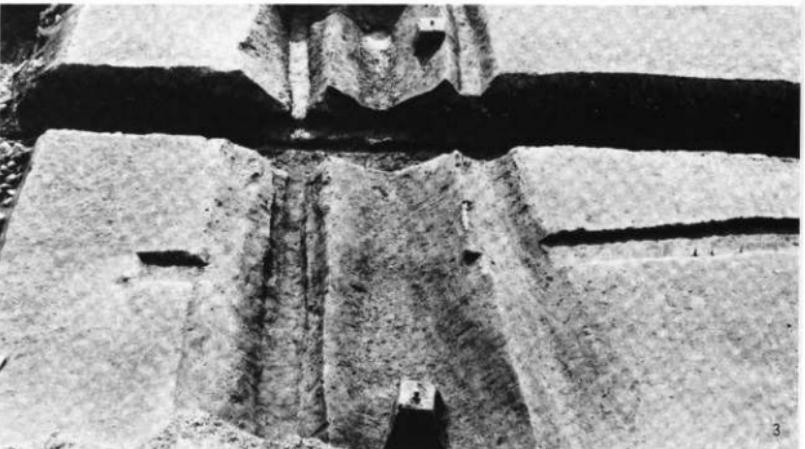
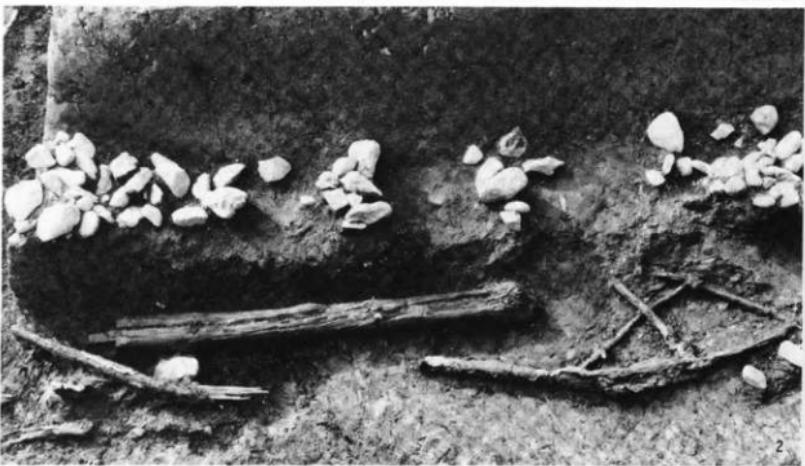
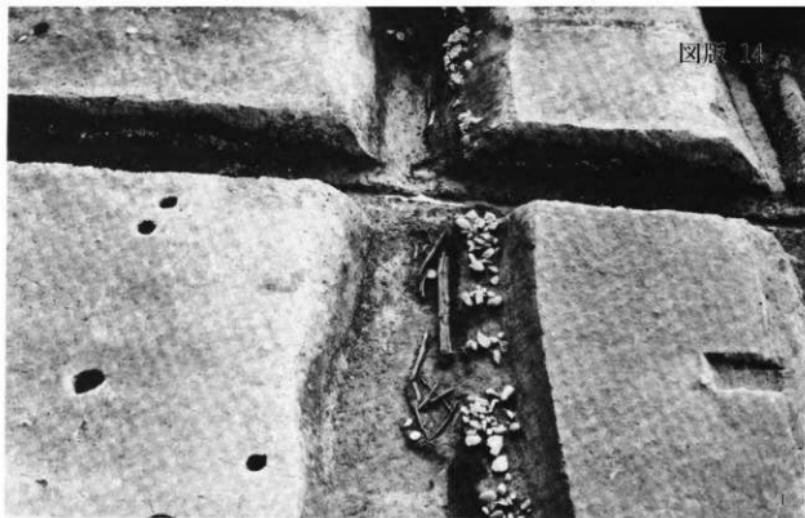
3. SX03 土器集中箇所（底面）



弥生面全景（西より）



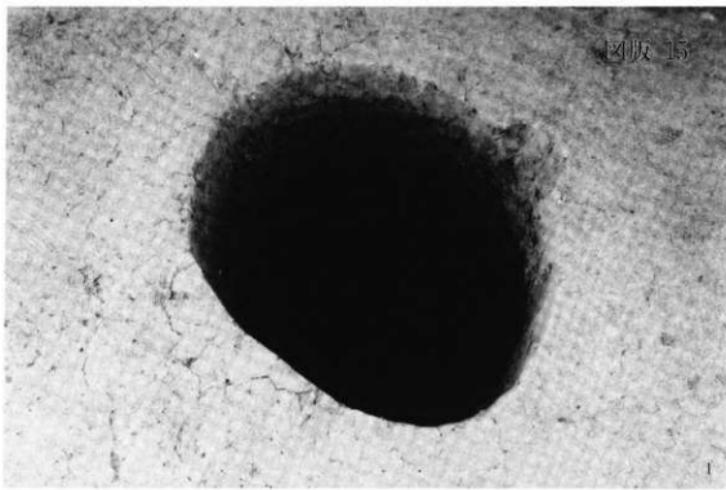
弥生面全景（東より）



1. SD02
溝状遺構
(北より)

2. SD02
溝状遺構
遺物出土状態

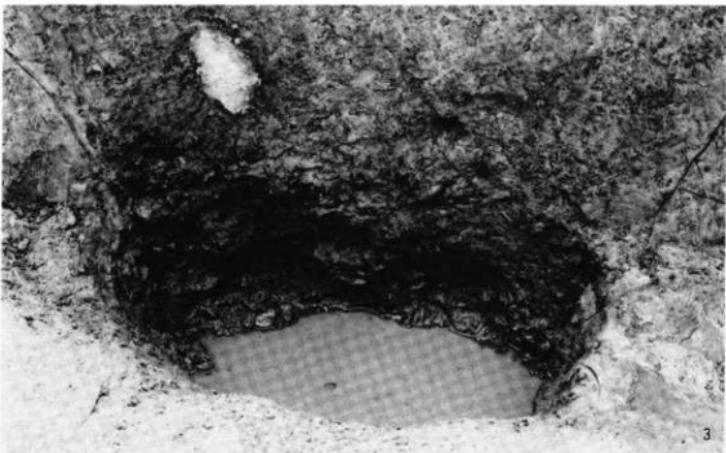
3. SD03-04-07
溝状遺構
(北より)



1



2

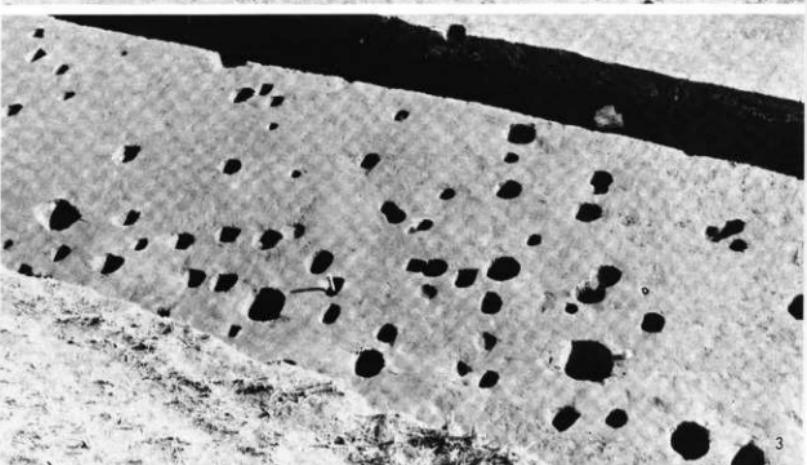
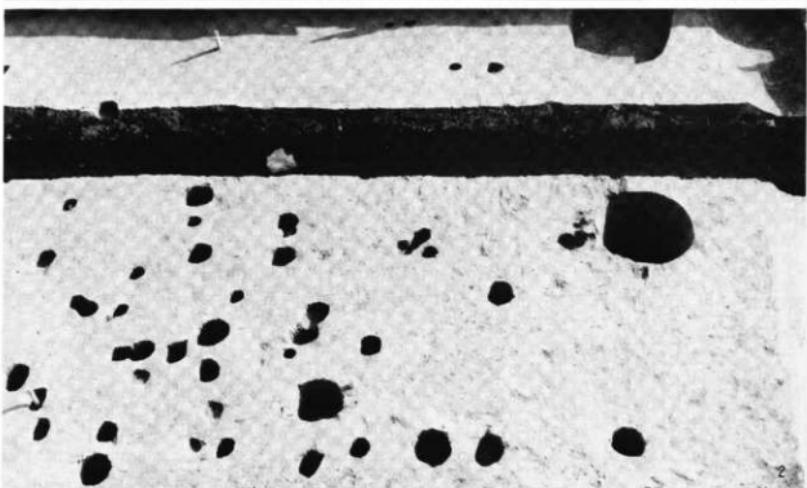
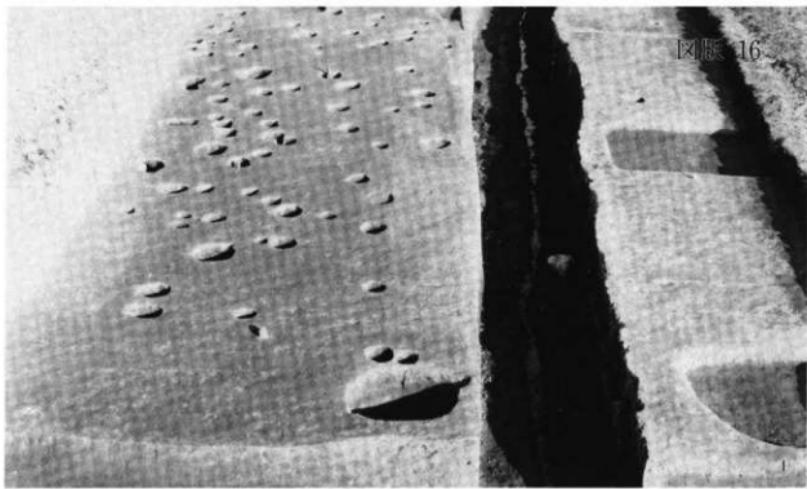


3

1. SE01
井戸状遺構
(北より)

2. SE01
井戸状遺構
曲物出土状態

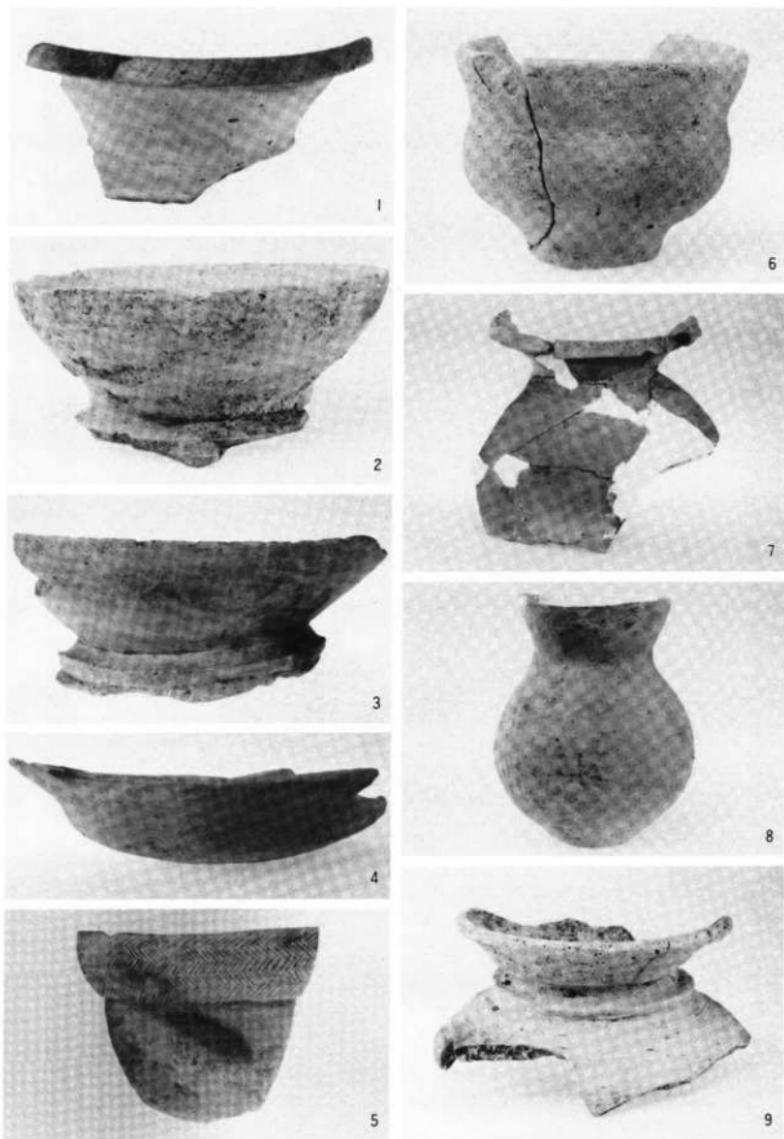
3. SE02
井戸状遺構
(北より)



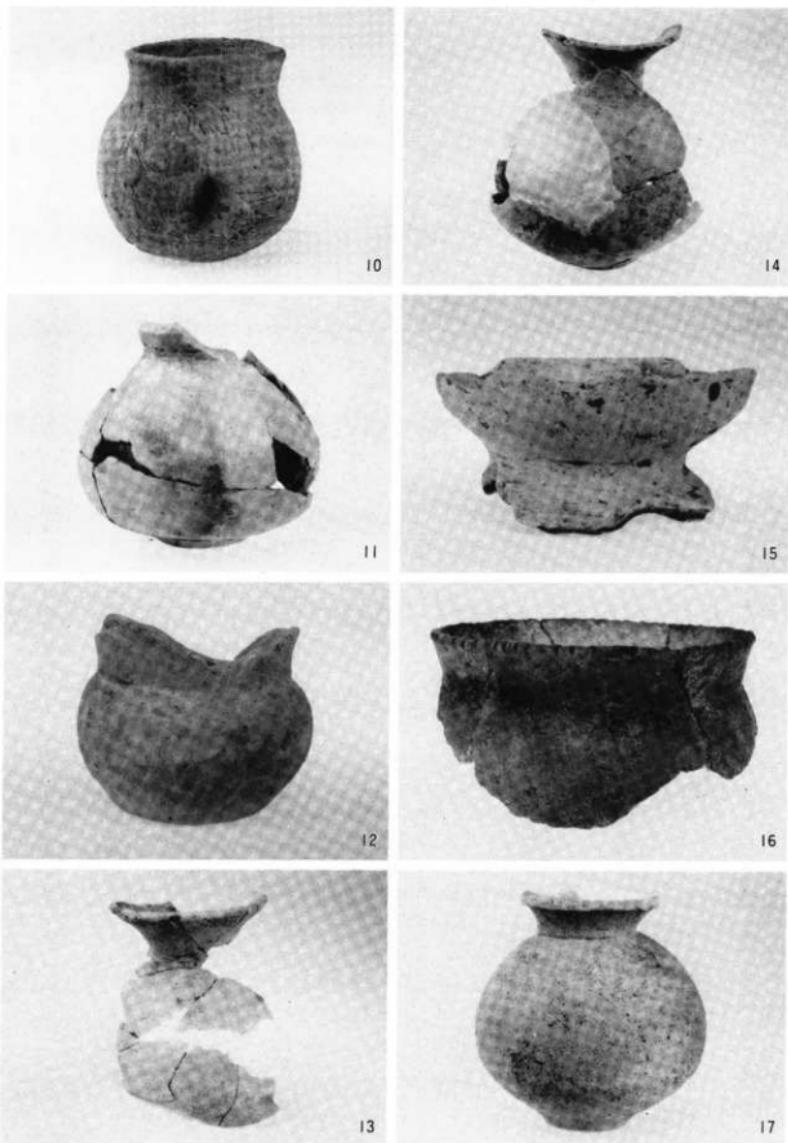
1. 中世面柱穴群
(西より)
2. 中世面柱穴群
(北より)
3. 中世面柱穴群
(北より)



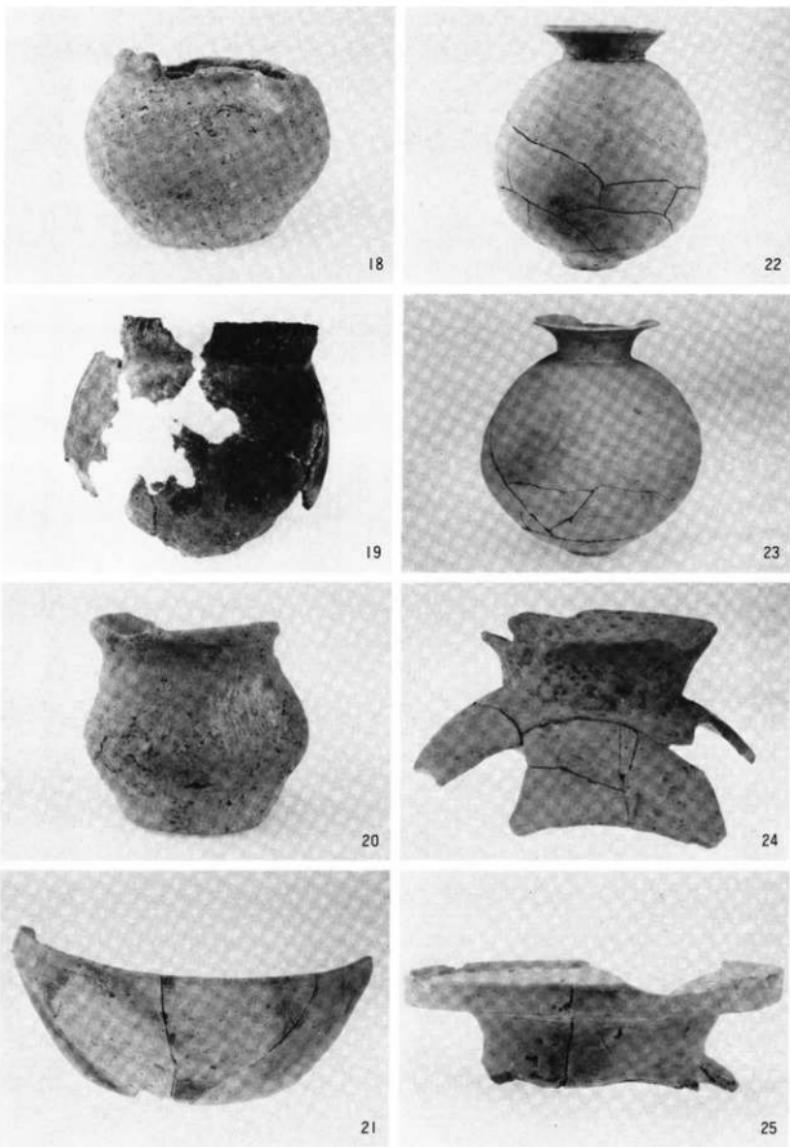
中世面全景（西より）



弥生土器(i)



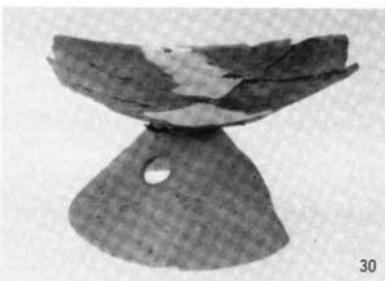
弥生土器(2)



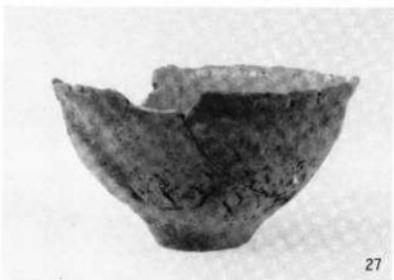
弥生土器(3)



26



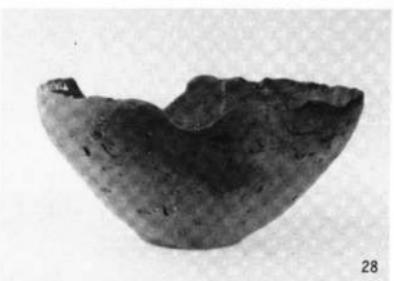
30



27



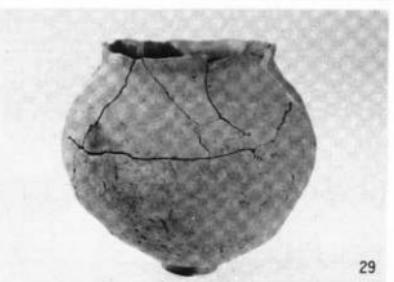
31



28



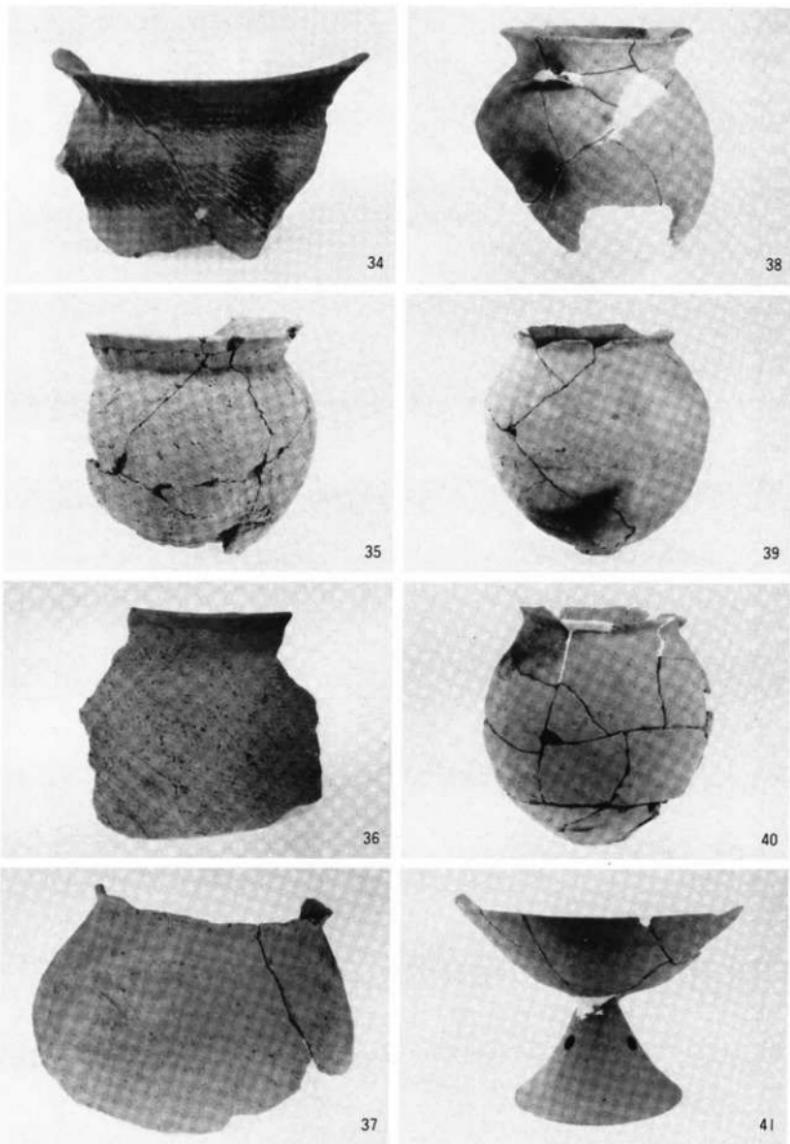
32



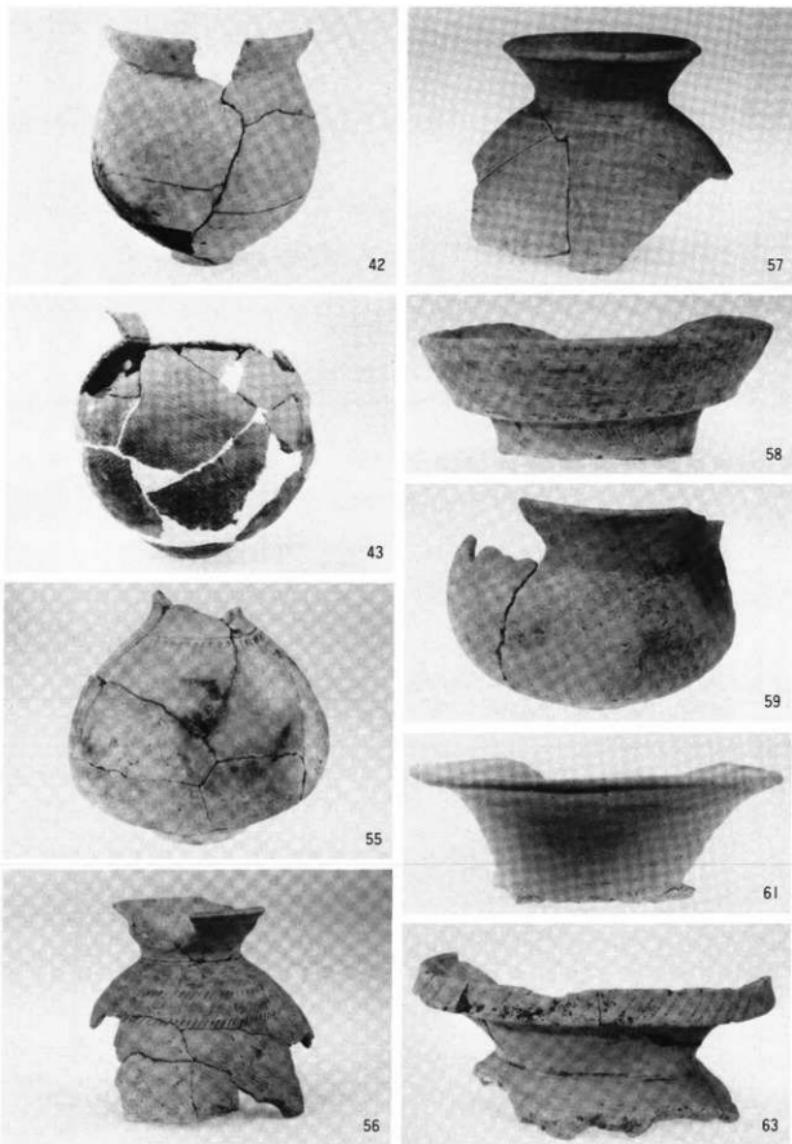
29



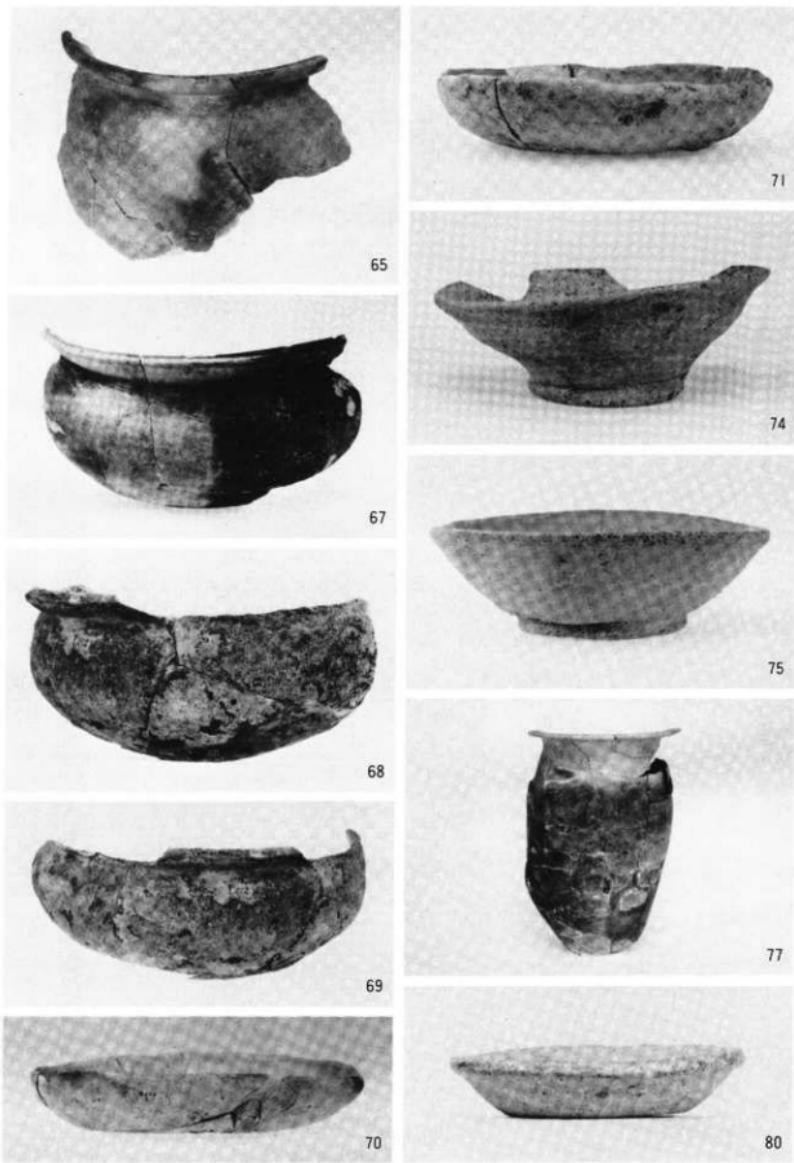
33



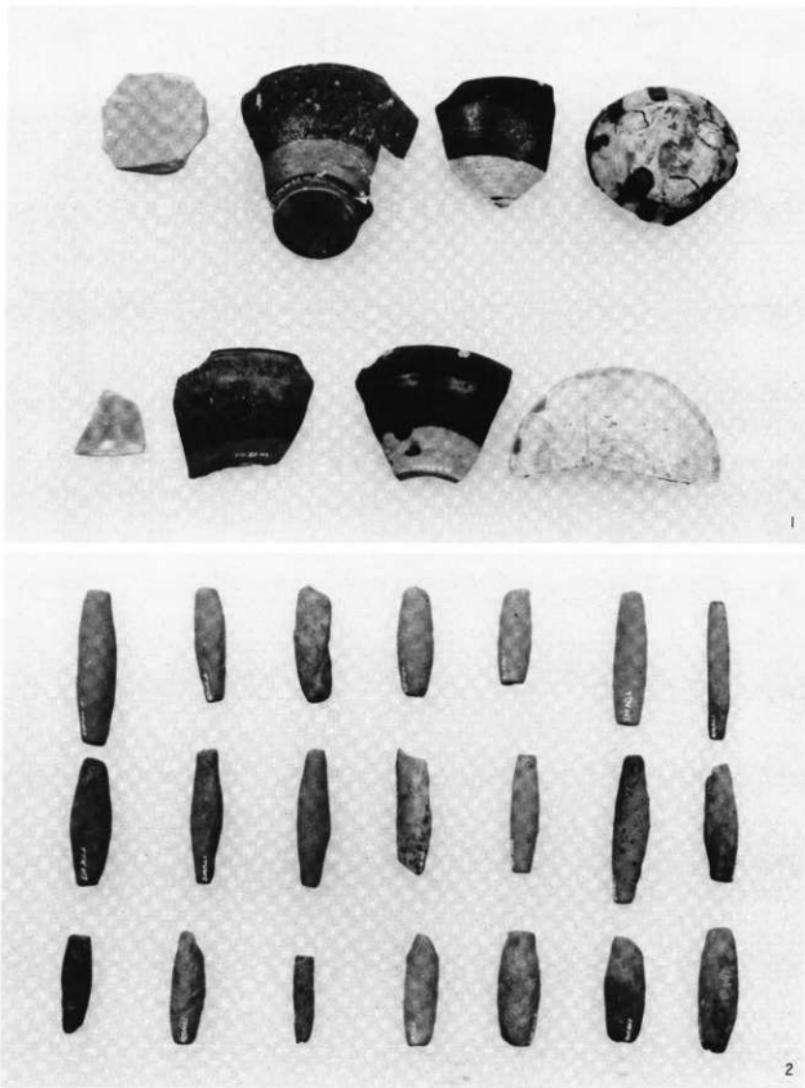
弥生土器(5)



弥生土器(6)



中世土器・陶器(I)



1. 中世陶磁器(2)

2. 土鐘

椿野遺跡Ⅰ

昭和57年度都田川河川改修工事
(浜松地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和59年3月24日

編集癆行 財団法人駿府博物館付属
静岡埋蔵文化財調査研究所

印刷所 株式会社 三 創
静岡市葵区3丁目5-30
TEL (0542) 82-4031

増刷 60.11.